

64-233



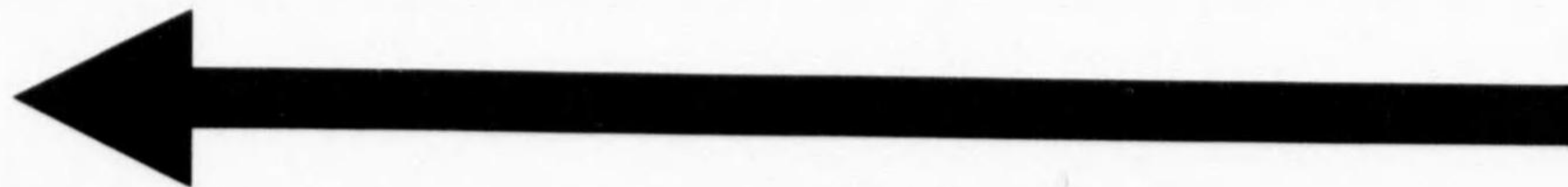
1200501278055

4

33



始





ZF 4F-85



維新日報纂輯

第四





# 維新日乘纂輯第四

## 例言

一 小野權之丞日記 小野權之丞諱は義忠會津藩士なり。文政元年四月九日を以て生れ明治二十二年四月七十二歳を以つて歿す。文久二年の冬藩主松平肥後守守護職として役に京都に赴くや權之丞隨從して京に在り外島機兵衛柴太一郎野村佐兵衛等と共に頗る斡旋する所ありき。本書は即ち權之丞の手記に係り文久三年在京中の見聞に筆を起し明治二年古河藩御預中の幽囚日記に終る。中に就き元治元年十二月君命を奉じて

例言

一





同役柴太一郎等と共に征長從軍諸藩に使し福山小倉等の諸藩黒田細川等の諸侯の勞を慰問し、明治元年輪王寺宮を奉じて東走同盟諸藩の間に斡旋し、翌年函館の役起るや五稜郭に籠城して傷病兵の慰藉看護に努めたる等史料として最も珍とすべし。本書の原本は元維新史料編纂會の秘藏する所なりしが大正大震の際不幸灰燼に歸したりしが幸にも別に私藏に係る副寫本を得て爰に之を収録せり。但し本日記は欠本多く記事の首尾一貫せざるものあると誤寫誤讀其他不審の點少からざるも今之を校定補正するの道なきを頗る遺憾と爲す。

一 伊藤和義日記 本書は伊藤俊夫氏の所藏に係り其記事は文久三年五月に始り翌元治元年六月に終る。和義は土州藩士伊藤和兌の息幼より文を好み武を練り夙に志を勤王の事に寄せ文久三年正月主命を奉じて京に上り三條中納言の衛士となる。是年八月政變起り七卿西竄の事あるや和義亦中納言に扈從して西下す。越へて元治元年の夏七卿並に長藩主雪窠の爲め同志と共に闕下に入り七月十九日夷川に於て敵の重圍に陥り遂に割腹して絶す時に年二十有一なり。本書は即ち此間の日記にして特に七卿西竄の真相を傳ふる絶好の史籍と謂ふべし。中に就き登都道中日記は七卿の三



田尻着後密かに入洛して京情を視察したるもの、又萩行日録は七卿の命を奉じて長州藩府に使せし往返紀行なり。本書末尾に日記殘闕一篇を附す、日附重複し記事の内容大同なりと雖も亦小異なきにあらざるを以て茲に之を併載す。敢て繁冗を厭はざるは是れ史料を尊重する所以なり。

一 酒井孫八郎日記 酒井孫八郎は諱を朝雄と云ふ。桑名藩士服部半藏の二男なり。出で、同藩家老職酒井三右衛門の嗣となる。幼にして藩學に入り漢籍を修め、後家に在りて師に就き和歌を學び、又繪畫を善くせり。明治元年鳥羽伏見の變起り藩主松平定敬公朝誼を受くる

や家老首席として難局に處し、世子萬之助君を奉じて恭順の實を擧げ、尋いで二年の春密かに函館に赴き、舊主定敬公を諫め伴ひて東京に抵り朝廷に自訴せしめたり。桑名藩の社稷をして全からしめたるは、實に孫八郎の功多きに居る。本書は即ち、明治元年正月より二年八月末に至る間孫八郎が苦心斡旋の顛末を詳記す、洵に桑名藩存祀の事情を知るに足る好史料なり。而して其原本は今烏有に歸せしも幸にして最も正確なる寫本の現に舊桑名藩主松平子爵家に存するあり。是に於てか本會は同藩出身の加太邦憲氏の好意により、其允許を得て之を謄寫し茲に収録する事となせり。仍ほ、孫



八郎は明治二年桑名藩大参事に任じ四年廢藩の際之を罷め東京に移居せしが、十二年四月病を以て歿す。享年卅五歳といふ。

一 安達清風日記(補遺) 本會嚮に安達清風日記一冊を上本して會員に頒ちたるが其慶應日記は二年七月二十四日の記事の一部分を収録して其餘を脱落し、直ちに明治元年日記を拾載したり。是れ恐らく印刷を急ぎし爲めの失ならむも編輯粗漏の罪亦免るべからず。今爰に慶應二年七月二十四日より慶應三年末日に至るまでの日記を補缺し附するに明治二年より四年までの日乗を以てす。但し明治二年後清風は閑地に在りし爲

にや記事極めて簡略加ふるに私事に係るもの多きが如しと雖も勉めて原書の儘を収録せり。只日附晴雨のみを記して記事なきものは便宜之を省略せり本書中日附の相繼がざるものあるは之が爲めなり。

昭和二年二月

日本史籍協會



# 維新日乘纂輯第四

## 目次

### 一 小野權之丞日記

文久三癸亥年日記

自正月二日  
至二月晦日

一頁

元治元甲子年日記

自十一月廿五日  
至十二月廿八日

六七

慶應元乙丑年日記

自正月七日  
至同月十七日

九七

明治元戊辰年日記

自六月十八日  
至十一月八日

一一五

明治二己巳年日記

自十二月廿三日  
至十二月廿三日

一三九

### 一 伊藤和義日記

文久三年日記

自五月十一日  
至十二月十四日

二一七

登都道中日記

自文久三年九月廿八日  
至同年十月十三日

二四九

目次

一



目次

萩行日録 自文久三年十一月七日 至同年十二月二日

元治元年日記 自正月朔日 至六月五日

日記殘闕 文久三年 元治元年

一 酒井孫八郎日記

明治元戊辰歲 自正月元日 至十二月廿九日

明治二己巳年 自正月元日 至八月廿七日

一 安達清風日記 (補遺)

慶應二丙寅日記 自七月廿四日 至十二月晦日

慶應三丁卯日記 自正月元日 至十二月晦日

明治二年己巳日記 自正月元日 至十一月廿四日

明治三年庚午日記 自正月元日 至十二月十六日

明治四年辛未日記 自正月十日 至十二月十六日

二五五

二六三

二九九

三〇五

三七七

三九一

四四五

四九七

五〇九

五一七

小野權之丞日記





文久三癸亥年日記

自正月二日  
至二月晦日



○正月之日當時上京之諸侯於學習院年禮申上らる方々

松平長門守 毛利淡路守 松平相模守 松平土佐守 伊達伊守豫

池田信濃守 加藤出羽守 龜井隱岐守 松平阿波守 中川修理太夫

右何れも大紋着用駕脇のしめ麻上下也

長岡良之助熨斗目麻上下ニ而駕脇も同前也

御名備家土岐出羽守松平長門守毛利淡路守松平相模守松平土佐守伊達

伊豫守

右方々參内之義被 仰出

○同四日

一來ル二月 將軍様御軍艦ニ而御上洛一旦大坂御城へ著御夫より淀川筋

小野權之丞日記 (文久三年正月)



通船にて伏見の御一泊翌日二條城へ被爲 入候旨關東の傳奏衆へ御達  
○同五日

一橋様東海道伊勢路御通行今日御上著也東本願寺御旅館

○同六日

一加藤出羽守の爲窺 天機縮緬二十疋御進獻也右徳大寺公へ内々願  
一寺町通り綾小路木戸張紙宇和島御隠居詰之足輕持歸ル 其文ニ曰

一字和島老賊義戊午以來幽閉之處格別之義 朝恩再出にも候得は屹度  
國家之御爲御報恩可仕筈有志之者共にも孰も目を留相待候所御上京  
以之外因循偷安之説を唱ひ 第一 朝命違背ニ爲るハ有志列國を離  
間いたし天下大亂之基を起し候段言語に絶し不届之至早々改心罪を  
謝し不申候而ハ旅館ニ討入攘夷之血祭可致者也右ニ付老公家來之面  
々ハ命惜き者共ハ早々國元へ引取可申旨被申渡國元の強勇之者四百  
人斗早々登候様飛脚にて申遣當分の内薩州へ被相頼強勇之者百人斗

爲加勢相詰候由

此加勢之義ハ虚説との事也

○同八日

一松平三河守家老黒田彦四郎傳奏へ被召 御内勅ニ

松平三河守赤心之趣達 叡聞候間登京有之候は暫時滞在爲國家盡力  
有之候様被遊度被 仰出候事

一關東ニ而今度衣服御改革之義ニハ有之候得共 勅使并御所之御使請候  
節は矢張熨斗目長袴着用可然旨傳奏衆被申聞候由牧野備前守の申越候  
就てハ今度御上洛ニ付御供等も上京之面々布衣迄ハ時宜ニ依熨斗目長  
袴着用候儀も可有之其以下ハ都而服紗小袖半袴相用候筈ニ付用意有之  
可然旨萬石以上以下御供衆之面々へ寄々可被達候事

○同十日

一阿州の御馬拾疋 禁裡へ献上候事



藤堂

一 津侯が初代正宗短刀獻上

黒田

一 筑前侯右御短刀御拵一式

一 龜井隱岐守が有職之馬具五拾獻上

一 上杉彈正大弼今日出京清水成就院へ旅館也

○同十三日

一 關東ニ有宇野八郎を殺害し新シ橋外御堀端へ建札いたし候由曰

右之者東櫻と號し年來有志之徒ニ交り事實探索致し姦吏とも内通せしめ數多誠忠之士を害ひたる謗詐反覆天地ニ不可容大罪依之如此加天誅もの也

是ハ永井飛騨守臣ニ有此節變心いたし候故殺害せしといふ

○同十五日

一 昨夜大宮通御池上ル所中座長屋と申處に林助と申者あり彼宅へ浪士廿人斗表戸踏破り入込同人首を切落し其向ニ勘助と申候役方有之其表戸

踏破り入込候處早速逃去行方不知故夫より姊小路大宮東へ入右同様入込候處文吉義御用向にて越前敦賀へ出向留守中故歸り候由

一 此浪人共ハ薩長土之者共之所爲ならんと風説也

一 松平大膳大夫御用召參 内從四位上參議御推任叙 御鳳輦拜見被 仰付黃金作眞之御太刀拜領之

一 中山卿正親町三條卿被辭大納言 二月廿九日辭職被聞召

一 京都沙汰

近頃無名之投書は元來從國忠正義之心底相興候儀ニ候得共却而人心可致騒動候殊ニ去月廿四日關白殿青蓮院宮前關白殿其外兩役家ニ投書有之候昨年十一月薩長土之三藩申立候儀も有之候次第ニ付諸藩にハ右様之儀致し候ハ尤有之間數候何之人之所作ニ候哉取調有之度關白殿被

○命候事

但言路を塞候ニハ無之候以來致告訴候儀も候ハ、書姓名其節ハ可申



出候其上御採用有無ハ 朝廷之御所置ニ可有之候事

○同十七日

一御軍艦ニ御上洛被遊候ニ付 御乗船日限二月廿六日

右之外於京都ハ御所司代ハ御達有之

一松平大膳大夫今日參 内 毛利左京亮參 内可有之旨被仰出

一近衛關白御退職 被爲在鷹司右府公へ關白 宣下 御内意有之候

一此頃於 御所國事方と申官人出來議傳兩奏其外二十人斗有之由

是ハ上京之大名方思召を御尋被遊候官人之由青蓮院宮此官を辭し給

ふ事下候云々也

○同十八日

一龜井隱岐守 中川修理大夫 池田信濃守 加藤出羽守參 内

○同廿日

一田安大納言殿御事 御後見中御政事向御不都合之事共有之對京都深く

被恐入候ニ付隱居御願之通被 仰出唯今迄被進候十萬石徳川壽千代殿

へ被進候旨被 仰出

○同廿一日

一關東ニ若年寄被 仰付 寺社奉行有馬遠江守

○同廿二日

一松平大膳大夫京都出立歸國

一松平相模守去ル四日同斷歸國之處今日再出京

一小笠原圖書頭今日參 内

一關東ニ松平閑叟

今般文武御修行筋相談被 仰出候處時々罷出御世話申上御満足思召候  
依而ハ今暫く在府被 仰付御相談被遊度思召候得共無程 御上洛も被  
遊候義且京都御用も有之事故此節上京候様被 仰付候尤京地御用相濟  
候ハ、勝手次第佐賀表へ引取當節柄ニ付長崎表御備向等肥前守へ相談



可被取調候尤存候儀も候ハ、可被申上候猶出府の儀ハ追而被 仰出候  
間其節ハ早速出府致し不相替御世話申上候様ニとの御沙汰ニ候事  
右之通被 仰出候付翌廿四日閑叟ハ差出候書付并御附札

今度私儀京地御用相濟候上ハ勝手次第佐賀表へ引取當節柄ニ付長崎  
表御備向等は肥前守申談取調存付候儀ハ可申上旨被相達奉畏候右ニ  
付備向爲取調長崎表へ相越候節ハ長崎奉行へ遂對談候義も可有之候  
間御開置被下度御座候以上

御附札書面之趣承置候尤長崎奉行へも相達置候事

○同廿三日

一鷹司前右府公へ關白 宣下有之候即日拜賀被行翌日廿四日御直衣被拜  
領之

近衛前關白殿 内覽如元 宣下有之

一池内大學之首を大坂難波橋ニ梟首し右へ札を建て曰

此者高貴之御方々の恩顧を蒙り正義之士ニ從ひ周旋致し候處終ニ反  
覆し姦吏ニ相通し精忠の士を數多斃し猶も困らめれ其罪惡不容天地  
依之加誅戮令梟首者也

右大學の兩耳を切取竹之皮一包ミ白木箱ニ入之封書添中山大納言殿正  
親町三條大納言殿亭へ投込候由中山殿ハ此耳へ聞込候次第有之との趣  
ニ而風聞不宜由

右大學之兩耳投込ミ之段兩大納言殿ハ傳奏衆へ御達相成傳奏衆ハ禁裡  
御所附衆へ被達御附衆ハ受取ニ被參其旨所司代へ被申通京都町奉行ニ  
相渡町奉行ハ大坂町奉行へ被通候處大學身寄之者京都へ罷登候様於浪  
花表御番所ハ御沙汰ニ付身寄之者兩人出京して大學之兩耳於京都町奉  
行所ハ請取下坂す

右大學ハ京都住之儒者にて當時大坂住也昨廿二日松平容堂ハ依招罷越  
歸之砌浪士躰之もの五六人付添來大學居宅之邊ニ而駕ハ引出し及殺害



同夜中於難波橋梟首いたし候由右大學士州邸ニ席上之作

細雨春帆送旌火輪船到浪花城英名久仰攘夷策雄略早修航海情何幸  
今宵侍瓊謙側聞明發向神京恩光殊照艸茅者燈下揮毫紙有聲

○同廿五日

一尾張前大納言殿御出京御旅館妙顯寺塔頭也

一細川越中守今日參 内可有旨去ル廿日被仰出候處今晚ニ至 禁中御差  
問之儀被爲在候由ニ否暫延引日限追而 御沙汰之旨被 仰出候

一松平長門守自分屋敷普請中下嵯峨天龍寺へ旅館

○同廿七日

一中山大納言議奏役山陵御用掛り御免

一鷹司公御裏政所様ニ從三位 宣下

一正親町三條大納言依所勞議奏役願之通御免

○同廿八日

一青蓮院宮御還俗之 御内意被 仰出 德大寺中納言阿野宰相中將 山

陵御用掛被 仰出

一佐竹右京大夫今日出京

一下立賣千本東ニ入千種少將御内賀川肇宅へ何人とも不知這入首討取直

ニ立去ル其節書置候文面ニ曰

賀川 肇

此一條ニ付町内ニ迷惑を掛申間敷様所置可致事

獻毒之事 叡山僧ニ呪咀之事

若州引留ニ付三浦七兵衛藤田權兵衛等へ示談候事

兩嬪之事 島田之事 近衛老婆之事 岡本肥後守之事 手先文吉之

事

賀川之罪狀は總て文吉白狀之旨を以詰問廢亡之事

與力加納繁三郎渡邊金三郎始終申合候事



正月十五日兩嬪三奸再出之内願書差出候處御下相成候事

十二月廿九日夜大炊御門殿千種殿同道ニ高畑式部女宅へ參候事

右ニ付加誅戮者也高島ト岡崎村住居女寄人也

此家下女某儀は以死主人之在宅を隠し候段感心之者也小兒右志操

右肇之首 一橋殿旅館東本願寺門前夜分持行候而封書添有之

今般攘夷御遵奉ニ相成候上ハ一日も早く御拒絕不相成候而不叶義候

處兎角姑息偷安之御庶議ニ被爲渡必竟御遵奉は名而已にして内情ハ

是非開國通商ニ御説得の御手段相違有間敷天下舉而御疑惑申上居候

事ニ御座候萬一左様ニ而ハ 朝命御輕蔑之處何と申開可被成哉天下

有志之者此度御ゆるし申間敷候願は眞實之御遵奉ニ相成破攘之期限

早々 御定被成是迄天下舉而御疑惑申上居候事氷解ニ至候御所置今

日之急務と奉存候此首甚乍龜末攘夷血祭之御祝之驗迄奉進覽候各方

ハ早々一橋殿に御披露可被下候

小笠原圖書頭殿 岡部駿河守殿

澤 勘七郎殿

右肇兩腕千種岩倉兩家へ何人共不知持行於内玄關乞案内取次罷出候處

内玄關に上り差出候由八九人斗も同道之趣腕添書

此手ハ國賊賀川肇之手ニ御坐候肇儀は其主人千種殿へは別而御親敷

候事故定而御慕敷も可有之と進上仕候直に御届可給候一昨夜踏込及

詰問實情承届候且又少將衛門兩嬪復位之事世間取沙汰有之萬一左様

之筋相立候様ニ而は不得止事屹度處置可仕候此旨兩嬪へ早々御通可

給候也

千種殿雜掌中

一岩倉殿へも同文言之事

久留米上京爲御挨拶極密々廣幡卿へ鐵炮貳挺三々五分筒致進上候由

一飛鳥井卿ハ肥前大村家老大村五郎兵衛ヲ被召御進



大村丹後守國忠之儀有之趣相聞候依之早々上京周旋可有之旨被 仰  
出候

一 所司代々左之通傳奏へ御達

兼々松平阿波守へ陸軍總裁 御沙汰之處願之通被成御免候事

一 御家ニ而藩中ニ之御命令

方今世上不容易折柄御由緒を 思召重き職掌蒙 仰候段武門之面目  
畢竟者御祖先様之御餘慶と難有事ニ候此上は十分粉骨盡誠忠 御代  
々様御美名不穢様致度心底ニ候處一身而已ニ而ハ如何様心得候共衆  
人一和致し候上ならてハ行届間敷依而ハ國家之爲精々盡力吳候様致  
度候扱今度於 公邊追々御改革相成候得共猶更 叡慮遵奉武備充實  
御國威更張外夷之侮を不請 公武御合躰ニ相成候様建白も致候得共  
面々も其趣厚相心得登京候而ハ  
輦轂之下別而謹慎を加へ外ニハ柔順を主とし内ニハ義勇を貯ひ血氣

ニ不馳大切ニ臨從容として事を處するの舉動肝要ニ候尤諸藩有志之  
徒其餘浪士之内ニ而も 皇國之御爲を唱候者ハ同士傍輩之思ひをな  
し筋合を賞應對心得可有之事

但國之者共急速出府候處不計も御都合有之追々出起延引ニ相成此  
寒天不自由之住居滞留之段憐察致候此先永き事にも有之間敷能々  
加養難儀を凌ぎ且諸事謹慎心を附候様致度事にて將又本文之存念  
書貫通有之間敷と頭々心得の爲見せ置候事

一 御參 内 天顏御拜天盃御頂戴於江戸表 御遵奉筋御周旋御行届被遊  
候ニ付 紅御衣御拜領御陣羽織ニなり御直垂ニなり相用候様との御沙  
汰其外 親王 准后御方へ御參入之事

一加藤出羽守に内勅

攝海邊夷船渡來も難計候由頻りに風聞ニ付 帝都異變非常之節人數  
差出防禦可有之様被 遊度御沙汰候事



一青蓮院宮國事係り御斷ニ付御本殿還御被爲在  
一對州家老被召 内勅

今度攘夷之決議ニ至り其藩之儀絶海之孤島本邦守邊之要地實備緊要  
候猶盡忠報告之周旋有之度事就攘夷御一定は 皇國御安危實ニ不容  
易儀全國一和一知 叡慮於不遵奉は難相成一同合心戮力盡忠有之度  
其藩兼而赤心報國之聞有之候間殊ニ 御沙汰候事

一戸田越前守隨從戸田和三郎へ以 思召從五位下大和守 宣下是山陵御  
修補御用相勤付也

一京都町令

一橋殿通行之節拾五歳以上之者共可致下坐旨相觸置候得とも向後不及  
其儀往來行違不苦候

一松平容堂出京旅館智積院

一關東命令

今度攘夷一決被 仰出候付而ハ不慮之儀難計候間爲御守衛 帝都四  
方山嶽之立木勝手ニ切拂候儀は停止候併民間柴薪之憂も可有之候間  
下草木切拂候儀勝手たるへき旨被 仰出候此旨相心得可申候

一京都所司代方 奏書

御官位御一等御辭退被申上候處厚以 叡慮御差留相成難有被存候御  
禮之儀は追而松平春嶽上京之上委細可申上候

一在京之諸侯方旅館

松平阿波守	<small>洛東南 寺東</small>	伊達伊豫守	<small>寺町四條入</small>	龜井隱岐守	<small>洛東高臺 寺塔頭入</small>	加藤
出羽守	<small>今出川北入 寺十念寺佛陀寺</small>	中川修理大夫	<small>三本木町 寺本</small>	松平大膳太夫	<small>河原町入 寺</small>	松
平長門守	<small>河原町二條入 寺高田一身田掛所</small>	毛利淡路守	<small>紫野大德 寺塔頭</small>	毛利左京亮	<small>同斷 寺</small>	池田
信濃守	<small>洛西妙心 寺塔頭</small>	松平土佐守	<small>三條南入 寺</small>	長岡良之助	<small>洛東南 寺塔頭</small>	細川越
中守	<small>南禪寺 寺塔頭</small>	尾張前大納言殿	<small>近衛殿 寺別莊</small>	一橋中納言殿	<small>東本 寺</small>	備前侯同勢
妙覺寺	<small>一山</small>	有馬中務大輔	<small>洛東頂 寺妙</small>	松平美濃守	<small>洛東大德 寺塔頭</small>	因州侯同勢
						藤



堂津侯 和泉守堀川錦小路同自分屋敷 薩州侯同勢 松平修理太夫 錦小路東洞院自分屋敷 數寺町姉小路本能寺

一 佐竹右京太夫使者宇都宮帶刀御役家へ罷出申上候口上手扣

去月十八日佐竹右京太夫家來御呼出候而右京太夫儀明春 御上洛之節上京可仕候處方今攘夷御一決ニ付非常御備爲國家早々上京盡力仕候様被 遊度旨御沙汰之趣早速右京太夫へ申達候處委曲奉畏候依之國許に申遣爲差登候供方人數無殘相揃不申候共取急出京可仕候段申參候右御受以使者申上候

○二月二日

一 龜井隱岐守京都發足出府候事

○同三日

一日光奉幣使是迄宰相官參向之處臣下は之奉幣宰相ニ而ハ不相當ニ付此節殿上人と被 仰出候事

但正月五日橋本宰相殿へ日光奉幣使御沙汰之處今日油小路中將殿へ

御沙汰相成候事

○同五日

一 尾張前大納言殿細川越中守佐竹右京太夫參 内之旨被 仰出之

但尾張殿來ル七日巳之刻細川佐竹同日巳ノ半刻參 内有之候也

○同六日

一 洛南唐橋村庄屋宗助變死之事

此もの千種卿百姓ニ而奸賊に與し候由何人とも不知今晚同人宅へ踏込討果し首無之骸ハ外ニ捨有之候

右宗助首翌七日松平容堂旅亭河原町三條南へ入自分屋敷裏高瀬川橋ニ更紗風呂敷ニ包書面添有之

右ハ年來千種家ニ致奸計相助候者にて今般攘夷之勅旨被 仰出 大樹公御上洛ニ付而ハ太平遊惰之弊を一洗し皇國之武威を八蠻に輝し候儀今日機會不可失 老公様 御上洛御處置依而實以神國之安危ニ



相係り候事不容易速ニ攘夷之期限を決し人心歸向を定め多年奉惱震  
襟候醜夷を一期ニ御退治被爲在度天下萬民之所嘆願候依而此首一輕  
賊之もの共實儉候ニハ不足候得共加誅戮候先血祭之驗迄轅門ニ奉備  
候宜御披露可給候也

一是迄 神武天皇御陵ハ 勅使參向無之候處先年來被 思召候□當二  
月下旬大中納言之參向之旨 御内意有之事

○同七日

一松平安藝守再上京鷹司關白殿伺公 禁裡益御機嫌能被遊御座候哉乍恐  
承知仕度奉存候將又關白様彌御安泰被成御座候哉承度奉存候兼而御案  
内申上候通今日上京致候付參殿仕候是等之趣可然頼入候  
入道准后様 中納言中將様へも同様宜  
一松平隱岐守使者吉澤勘助 今度御上洛ニ付隱岐守儀御供押被 仰付罷  
登候就而ハ御當地諸事不案内之儀何角宜奉願候依之輕少之至御坐候得

共目錄之通進上仕候此段諸大夫中迄宜願御沙汰候

○同九日

一御軍艦ニ而御上洛可被遊旨被 仰出候處御都合も有之候付來ル十三日  
御發駕東海道筋御上洛被遊候旨被 仰出候省略方之儀兼而厚被 仰出  
之趣も有之候得共猶一際御供方其外格別ニ御減略被 仰出候事  
一京都町奉行組屋敷與力同心共立退假宅可致旨被 仰出尤御上洛御下宿  
ニ相成候間來ル十五日迄不殘立退候様御沙汰ニ相成  
一二條御城附與力同心共家宅半分は御下宿ニ相成旨被 仰出併立退ニ不  
及候事

○同十一日

一尾張前大納言殿今日京都發足歸國  
一浪士鷹司殿下ハ推參之事  
今日巳ノ刻浪人四人殿下ハ直參御玄關前ニ於て兩刀を土砂之上ニ置玄



關の上り尤案内取次は面會國家之一儀ニ付乍恐差出奉拜閱度旨精々願  
 出野心無之旨押る申述候得共殿下御逢無之直ニ傳奏被召寄及應接候處  
 一點不開入ニ付松平長門守殿被 召候得は未ノ刻過一騎乗ニ而參殿之  
 上御取扱を以浪人心服之段巨細傳奏議奏且長門守殿列坐之上申述候由  
 ニ而殿下 酉ノ刻過より俄ニ御參 内引續き傳議御參 内相成丑刻頃  
 漸浪人御誘引ニ而長門守殿旅館へ引取扱殿下始御參 内之上浪人言ふ  
 口上之旨及 奏聞候處早速爲 勅使阿野宰相中將殿野宮宰相中將殿添  
 使三條中納言殿橋本宰相殿豐岡大藏卿殿滋野井中將殿正親町少將殿姉  
 小路小將殿等一橋中納言殿御旅館へ被行向寅刻過御歸館相成候事  
 一御名ニ而京都町觸

攘夷御一決之此節御改革被 仰出候付而ハ舊弊一新人心協和無之候而  
 ハ不相成儀ニ候處近來 輦穀之下私ニ殺害等之儀有之畢竟言語雍<sup>塞</sup>□諸  
 有司不行届之處深恐入候次第ニ付上下之情意貫達いたし皇國之御爲御

不爲ニ係り候儀ハ勿論内外大小事となく善惡とも隱匿致居候事共聊無  
 憚筋々へ早々可申出候

但憚忌諱候儀も有之而ハ封書ニ而直様差出可申自分聞届候儀も可有  
 之候

右町觸日次不分明なれとも下學習院申立候文に見へたれハ其以前ニ記  
 置也

一關東ニ而將軍様來十三日當地御發駕御供揃御刻限卯上刻陸路御上洛ニ  
 付御休泊

御休	品川	程ヶ谷	藤澤
御泊	川崎	戸塚	大磯
御泊	小田原	三島	箱根
御泊	興津	由井	吉原
御宿共	駿府御城	岡部	藤枝
			金谷
			掛川



見附 濱松 新井 吉田 赤坂  
 岡崎 池鯉鮒 宮 佐屋 桑名  
 四日市 龜山 石藥師 坂下 土山  
 水口 石部 草津 大津 御京著  
 御泊

一此度世上通用之爲銅四文錢吹立

○同十二日

一廣幡大納言殿長谷三位殿議奏 被仰出之堀川三位堀川刑部大輔愛宕大

夫御近□習之處本番所參勤被 仰出

一御上洛之節御行列

榊原式部大輔 御老中若年寄衆 御幕長持二掉 講武所御鐵炮七十二挺  
 御玉藥箱十荷  
 講武所頭衆一騎 同御鐵炮七十二挺 同一騎 御旗長持二掉 同串  
 御使番一騎 御徒目付 御小人目付 小荷駄拂 御徒目付 御徒目付  
 御目附 御小人目付 講武所方御鐵砲七十二挺 講武所頭衆一騎 御側衆  
 同 御鐵炮

七十二挺 講武所奉行一騎 虎ノ皮 御拋鞘御鎗廿五本 千人頭一騎 御召替御

馬二疋 御挾箱四走 御具足 御臺傘 御立傘 御床机 御曲錄

御徒方一組頭 御徒方一組頭 鎗術方廿五人 同 御術方廿五人 同廿五人 御長刀 御腰物筒

御手筒 御召替 御小道具  
 同御徒目付二人 御床机  
 同 御徒目付二人 御持鎗五本  
 同 御目付二人 御簀貳箱

御徒目付 御小人目付 御召御馬 御供御馬方 御馬印  
 同 御雨覆 御杖 御小翠笥 御足 御挾箱 御茶辨當御丸辨當

御貝 御小性組一組 三千銃御鐵炮 三十六挺 三千銃御鐵炮 三十六挺  
 同 御太鼓 同 同 同 同

御使番一騎 大御目付一騎 御目付一騎 御小人目付 御徒目付 御  
 中間目付 並御馬五疋 御側衆 同 同 奧外科 御小納戸追越長持  
 四掉 若年寄衆 御徒士押御中間拂 同勢御老中方御跡押 溜詰衆



○同十三日

一 將軍様五半時御發駕東海道 御旅行被爲在候也  
 一天朝御沙汰 大原左衛督裏辻侍從禁足 有栖川宮諸大夫藤木近江守閉  
 門 近衛公御近習坂田大内御暇 同公御内諸大夫兼官讃岐守中川宮御  
 内權少輔兼攝津守今大路民部權少輔右何も辭官隱居位階如元 儒者平  
 瀬數馬出發桂御所用人塚田左衛門隱居一條殿内諸大夫岡本甲斐守差扣  
 一 松平春嶽松平容堂來ル十六日參 内之旨被 仰出  
 一 岡部駿河守杉浦正一郎澤勘七郎京都江戶御老中へ之書簡  
 以急使啓上仕候然は此程中ハ激論のもの 幕府之御所置御因循ニ候間  
 嵩崇攘夷共御無覺束上之疑惑甚敷 御上洛之御日取廿一日ニ相成候  
 而も矢張億可申唯々名を設暴發邪ニ而四日ハ九日迄御平臥有之御相談  
 も被成兼居候次第ニ候得は追々切迫之勢有之八日ニハ容堂殿一橋殿御  
 旅館へ被相越此節之形勢ニ而ハ攘夷之期限をも御治定無之候ハ、如何

様之 勅諭出候哉も難計□□候間早々御相談可然と御決定之處九日  
 之朝鷹司殿下より早々期限御定申上有之候様申來候ニ付春嶽殿御旅館  
 へ肥後守殿容堂殿にも御一同ニ御集會種々御評議有之候上御決定之儀  
 は被 仰上候事ニ相成兩殿下ハ御入可被成處近衛殿ハ御斷ニ有之夜六  
 半時頃ハ御四人鷹司殿方へ御入ニ相成攘夷之期限御申上相成候處書面  
 ニ御認可被遣旨被命則左之通御書出ニ相成  
 一 攘夷江戸表歸著之上速ニ可致應接候事  
 一 先頃申上置候有志之者 御所置之儀早々御差出候様仕度猶又相願  
 候事  
 右之通御認被遣候然る處 此日激論之堂上鷹司殿方へ參り御談判濟之模様ハ御同  
 人ニ何度と責候由噂有之候藩士様も詰上り候哉と有  
 右ニ付而ハ期限と申事申來右之趣御座候處警期限御申上相成候共 御  
 上洛御留守中ニ而ハ應接取掛候事共相成間敷關白殿ハ御好ミハ三月と  
 四月と被致度由之事ニ候得共 還御之様子難計期限を以攘夷期限御受



も難相計候間十日ニ御面談ニ被 仰入御承知之處朝ニ至りて御參堂御  
 斷申來候ニ付春嶽殿御見込容堂殿御見込をも御相談として駿河守御旅  
 宿相廻候尾張前大納言殿方へ肥後守殿一同御越被申出御見込中納言殿  
 へ申上候處猶又學習院唯今御越御坐候様申來候得共御議論一定不致候  
 間御斷相成十一日ニ可罷出と被仰入候而御承知被成候得共俄ニ十一日  
 ニ春嶽殿御參 内被 仰出前夕右之御相談御問合も無之學習院へも御  
 出張被成且容堂殿水瀉にて御相談にも御出無之候間猶又右之趣御申入  
 十四日可申上と被 仰出候得共是非翌日十二日ニ被成度と申出夫か爲  
 ニ春嶽殿御參 内も御延引相成候

右は前ニ順序ニ申上候

然る所十一日之夜五時過御所々唯今御使者として兩役其外四五人中納  
 言殿御旅館へ被參候間春嶽殿肥後守殿容堂殿ニも御出會可有之旨被  
 仰出大急ニ而夫々御通相成其内ニ四ツ時頃爲御使

三條中納言殿

橋本宰相中將

野宮宰相中將

阿野宰相中將

豊岡大藏卿

滋野井中將

正親町少將

右七人被相越候右之起りハ中山侍従と申人激論ニ而千種入道を殺害可  
 致とて土州激人武市半平太申者へ相談候處貴人ニ而ハ不宜とて差留候  
 由ニ而粟田宮の參候處御同人御不快之由ニ而御逢御斷相成候處取次之  
 者へ尙御不快ニ而も是非御面會申度ニ付今一應可申入と申取次之跡尾  
 直ニ奥ニ入粟田宮へ御面談を乞候ニ付御同人大立腹餘程議論も有之候  
 様子ニ而引取夫より但粟田宮は全  
其時作病之由久坂玄瑞に又談候處因循を破り可申間  
 引受可申と受合近衛殿下に相廻り候間今壹人の者ハ居込早々期限御定  
 無之ハ決候迄不食ニ而詰切餓死可致と申立 朝廷大騒動ニ相成暴發四  
 百人有之と申立此人數も  
不可信候恐怖ニ而哉右之次第ニ至候由夜九時過追々御  
 集會ニ相成御狩衣ニ而御應談有之候處堂上之勢巖石嚙付不申様子之由



御談方も少々御強有之候由ニ少々屈し候得共御趣意ハ期限速ニ相決可申旨ニ而篤と御評議と申事ニ而御退座之上御評論有之候處急ニ御治定も不相成御異論も有之候處御決定無之様子故彌御評決之御治定ハ左之通書面ニ而被差出候

今度以 御使蒙 仰候攘夷期限之儀ハ 大樹公江戸表御歸著之日を期限と定可申候猶大樹公上洛之上表向可申上候得共評決之處奉申上候以上

二月十一日

松平容堂

松平肥後守

松平春嶽

一橋中納言

名宛前之三人ニ連名

右之談判彼方ニ而ハ 御上洛御留守應接取掛可然との論ニ候間 將軍

様御留守之節兵端を相開候ハ御不都合ニ候故應接取掛り結句戰爭之覺悟ニ無之候ハ拒絕之御談判難被成候付是非御歸著被遊候上ニ相成候答ニ成申候右ニ付滯京之日合ハ少々も詰り候處御申□に相成此儀御上洛有之候ハ、其儘永く御引留可被成哉之□有之候但紛々ニ候相見へ申處十日之御猶豫候様可致との儀ニ付御歸著後廿日之御猶豫有之應接取掛候事ニ御談相成申候右書面被遣候ニ付彼方よりハ所司代を以書面差越可有之と申置候此方御評議餘程烈敷事ニ有之候終ニ夜明ニて御使退散ニ相成候右期限は兼々 勅使の御答之節も衆議之上被 仰上候事の處如此御迫り被 仰出候儀ニ付此儘ニ而ハ 震襟を被惱候旨も候而實以無御據一旦ハ關東御伺も不被遊候而御評決ニ相成候得は深御一同御恐懼之御様子ニ相見へ候得共其事を過ち被成候而ハ御伺相成候而も却而御趣意ニ違ひ可申筋ニ候間如此之御取計相成申候此一件徹夜之混雜中ニ筆紙ニ盡兼候儀ニ御坐候兩町奉行も罷出夫々惣出實以近來之珍事ニ御



坐候一昨夜々會津藩廻り相始め五十人斗一隊ニて三隊を爲廻候事と相成右市中追々亂妨相募り咎も無之婦女子迄も迷惑ニ相成候間嚴敷相廻り亂行見受候ハ、取押之手續相立申候右可申上旨中納言殿御沙汰ニ御坐候恐惶謹言

一幕府三奉行連名建白

京都表之儀ニ付評議申上候書付

三奉行在京岡部駿河守外兩人ハ申上候書面御下ケ一覽仕候處去ル十一日 勅使三條中納言外六卿ハ一橋御旅館へ被差向攘夷期限之儀を此度公方様江戸表歸御を期限と御定猶 公方様 御上洛之上表向可被 仰出候得共一橋殿始め御評決之處右之通書面を以前七卿へ御差出候段一橋殿御始メ右之通御取斗相成候は深御思慮も有之處共奉存候得共兼ハ 勅諭之御旨も天下之人民攘夷ニ一定無之候てハ人心一致ニも難至國亂之程も如何と被爲惱 叡慮候間於柳營彌攘夷ニ決定有之候速ニ諸

大名へ布告有之候之様被思召候尤策略之次第ハ武將之職掌ニ候間至當之公論ニ決定有之醜夷拒絶之期限をも 奏聞候様被 仰出候儀ニ付御上洛 御發駕御前諸大名存念 御尋有之策略之次第ハ關東へ御委任之義ニ付 御上洛ニ而夫々可被仰出候處未タ 御上洛も不被爲在以前已ニ前條之通り切迫之被 仰出御座候而ハ諸大名之存念御聞糺も無之人心一致之處をも御考合セ無之御委任之策略被 仰出も 御聞入無之無謀之戰爭を開敷百年昇平之熙作に浴し候萬民忽塗炭ニ苦ミ溝壑ニ轉斃仕候も無御貪著と申候儀は千も萬も有之間敷儀と奉存候是非夷虜御絶之儀被 仰出候ハねバ不相成次第にも候ハ、先第一京都之御守護御行當被遊間敷當時大坂其外御臺場向も御取建御調中と申事ニ而夫迄之御成功と申にも至間敷譬へ必死を極候共防戰之具無之而ハ目前之戰爭と相成候を御請之儀乍恐征夷 御職掌ニ而ハ御承諾ハ不相成 御上洛中如何様御日合相懸り候共再三前文之御趣意被仰上無之候而ハ相成間敷



右は日本國中大關係殊ニ東照宮以來之御仁德御武威も難相立御請被遊候而天下國家御爲不相成儀ニ候上ハ乍恐篤と御覺悟被遊候外有之間敷若又黨をなし候匪人共劫制仕候而右様之次第ニも相出候義ニ候得は御上洛被爲在候社幸ニ御座候間根元を裁候程之御嚴格成ル御所置被爲在度は儀は德川家之御盛衰浮沈にのミ無之天下萬民永世之處を御深慮被遊世界萬國に被爲對無謀不儀之汚名を御取不被遊日本之瑕瑾を御殘し無之様ニ奉存候右件々ハ不容易大事件ニ而國家之安危存亡ニ拘候儀ニ付恐入候儀迄心底を不殘申上候以上

○同十四日

- 一鍋島侯參 内有之 筑前侯出京旅館大徳寺山内也
- 一津山侯同斷旅館妙蓮寺也
- 一少將藤式部御暇斬髮之旨被 仰出之
- 一仁孝天皇御養子青蓮院一品尊融實者伏見宮故貞敬親王男當亥四十歲天台座主 御還俗之御内意勅

有之候處叡山僧都ハ佛道破戒之旨申立候由ニ候得共以 叡慮被 仰出候事ニ付彌御還俗之旨御沙汰候事

右何日御沙汰相成候哉不相知候得共御還俗御參 内之事有之候付事柄之序を以此處ニ記置也

○同十五日

- 一將軍様御上洛去ル十三日御發興東海道被遊御旅行候段關東ハ京都へ申來ル

御上洛御逗留日數十日之旨御老中方より被 仰越牧野備前守より達有之候段禁裏御附衆より被達候

○同十六日

- 一來ル十八日在京之面々參 内之旨被 仰出候

○同十八日

- 一青蓮宮自今被稱中川宮之旨被 仰出諸山陵年久敷荒廢候處此度御修補



被 仰出當月下旬 神武天皇山陵へ被立 宣命使之旨被 仰出

山陵使發遣日時定陣儀來廿一日巳ノ刻

右陣儀訖迄重輕服者可憚參 内之旨被 仰出候事

一在京之諸侯今日惣參 内 主上小御所へ出御於下段御達之旨有之何も

存念無之由ニテ恐入候段被 仰上殿下議傳出仕議奏衆方御口達相濟候

上左ニ書取爲見被下

大樹公上洛滞在日數十日之御治定相成候間二月廿一日出帆方海上往

反風波之障無御坐候得は四月中旬之内攘夷期限相成申候尤歸著日方

廿日御猶豫被下候儀ハ先夜も奉申上候通之儀ニ右日積相成候事

右書取ハ一橋松平春嶽松平肥後守松平容堂方諸卿へ相觸候事

在京之方々參内名前但○印之方ハ異船渡來申上  
候趣ニ依布京都引取候事

尾張前大納言殿 一橋中納言殿 松平春嶽

松平肥後守 ○松平相模守 松平淡路守

○松平美濃守 ○肥前前中將 上杉彈正大弼

土佐前侍從 細川越中守 松平出羽守

○松平長門守 佐竹右京大夫 松平安藝守

○中川修理大夫 ○池田信濃守 ○松平主殿頭

○松平阿波守 松平三河守 伊達伊豫守

毛利左京亮 溝口主膳正 松平兵部大輔

仙臺中將 ○細川良之助

○同十八日

一學習院社人方言上書白川家人古川美  
濃守取次出ス

一右趣意ハ東山邊所々野武士共致住居山行之者共衣服を剝取或は樵夫牧

童之行厨を奪ひなと候ニ付人々恐怖し山邊へ不赴故當節は伏見沿道へ

出沒し路人を惱し候聞有之候右は全く諸國方有志之徒出京之處路賃盡

候上之所業歟と被勘候



大樹公御上洛も近々有り旁々懸□且存付候儀ハ隱匿不致申立候様町觸迄も有之候時節ニ付愚意之趣不取敢言上仕候右之徒御取締有之度との趣也

一今度前中納言堀川三位差扣

○同十九日

一英國軍艦ハ差出候書翰之大意

英國之士官を生麥に於て殺害致し候島津三郎并一類之者を不殘召取英人立會之上首級を刎候様致し度此儀日本政府之威勢薄くして御所置難出來候ハ、償金五十萬ポンドテリング日本金三十萬兩ニ當ルを政府ハ御差出可有之其上にて薩州鹿兒島へ迫り島津家ハ殺害ニ逢候英人妻子養育料として三萬ドルヲを請取可申若相拒候得ハ戰爭可及候間日本政府ハ重き役人壹人檢使として是非とも英國軍艦へ御乗組之儀右は今十九日ハ廿日廿四時此廿日ハ日本政府之命也廿四時ハ全ク船將手切之猶豫ナル由之間ニ返答被下度猶

豫之期限來ル三月九日ニ當ル相過候得は即刻軍艦を廻し大坂并長崎箱館其外諸湊

ニ至迄出入之船を奪ひ且江戸を燒拂候趣是ハ英國之旗章并條約ニ對し日本之越度有之候故無據此事件ニ及申候

右書翰十九日差出廿日申立候由也

一此夏島津三郎歸路之節於神奈川驛英吉利人切殺候ニ付今度英國ハ軍艦八艘差向及應接候得共難題申越候故幕府取扱難相成候付窺 叡慮相成候由右之島津三郎首討取相渡可申哉薩州表へ軍艦差向可應接候哉二百萬ドル相送可申哉三ヶ條之内一ヶ條可及返答旨右二月十八日ハ廿日を限致延引候ハ、彼より可開兵端猶追々軍艦差向候由ニ而此頃異人凡見積五萬人斗も渡來候由言上前文三ヶ條何も不容易事件ニ付 勅許無之ニ付昨夜御用掛惣參 内ニ而衆議之上在京之外藩共ハ早々歸國海岸防禦之手當可致旨ニ而 御暇被 仰出候事

一天朝御沙汰



今度英國軍艦差向申立候趣難開届事件ニ付應接之上彼より必可開兵端  
形勢候條其心得可有之候事

一彦根侯同勢神奈川へ出張

一番手 正月二十八日 貫名 筑 後

二番手

同晦日 木 俣 土 佐

三番手 二月朔日 新野 左馬介

四番手

二月二日 岡 本 半 助

五番手 同五日 彦根侯井伊掃部頭

一松平長門守の傳奏衆被伺

今度蠻夷申立候三ヶ條御開届無之付而ハ外夷共攝海へ亂入之儀難計萬  
一持場へ亂入致候節一應は其旨趣を聞糺彼三ヶ條を重而申立候儀ニ候  
ハ、難開届旨斷然若承伏不仕候ハ、即時ニ戰鬪ニ可及候此段 朝議御  
決定候ハ、持場出張之藩士外人へ應接右御決定之趣を以て開答候様被  
仰付置度奉存候長門守儀兵庫持場へ出張被 仰付候間右申上候通心得  
候て不苦候儀可有御坐候哉何分御差圖被成下候様奉願上候

窺之通可然人體之者兩三人殘置長門守出張中御用在之召候節ハ何時  
ニ而も可致上京候様被 仰出候事

一松平長門守建白

今度非常之 震斷を以て倒海之大寇を掃攘し 皇國之武威を八蠻ニ御  
輝被爲遊度 思召候ニ就て必竟 御親征をも不被遊候而ハ不相叶時勢  
と奉恐察候癸丑以來度々伊勢賀茂石清水に攘夷安民の御祈願被遊候御  
事に候得ば此度攘夷期限御決議ニ付早々奉幣使御發遣有之度就中賀茂  
社ハ御間近所柄ニ候得ば非常之御破格を以被爲遊 御社參且泉涌寺へ  
も 御參詣被爲遊御代々様之叡靈に御報告無御座候而ハ不相濟儀奉存  
候是儀ハ大堰嵐山之行幸之類にも無之未曾有之大恥辱被爲雪 皇國を  
堅盤ニ被爲固度御孝敬之御至誠四海ニ顯赫被爲在度所謂天行健與申儀  
と奉存候賀茂泉涌寺御參詣は即 御親征御巡狩の御基本にも可有御座  
草莽之者共 鳳輦翠華之御餘光を奉拜候得はいか計感激奮興仕攘夷之



御大業も自是して相立可申と不堪歎願之至奉存候

○同廿一日

一明石侯出京旅館東山永觀寺也長岡良之助へ 天朝内命京都御警衛滞在

被 仰付候處國許海岸防禦之儀願出候ニ付願之通御暇被 仰付候事

一御老中の英人の返翰松平豊前守井上河内守連名

貴國第四月六日之書翰并別封共落手云々被申越候件々了承せり早速  
大君殿下に報通可致將同段其軍艦を以て薩摩國へ差渡夫々談判之品あ  
らんと由ニ亦今更別ニ辨論を費すを待す兼て其許に亦も我國之事情  
ハ承知被致候如くなれハ右之一舉ハ意外ニ患害差起り一層之萬難を重  
ね互ニ不和を醸し候場合ニ可至哉も難斗且我國之制度にも差響品々不  
都合之廉少からず深痛心する處なれハ右薩摩國へ軍艦差渡さんとの議  
は見合せ候様致度尤一條も政府ニ於て當節殊更に配慮有之折なれハ暫  
く其所置ニ任せられん様望む處ニ候就てハ高貴之士官一名乗組せ候義

は其需ニ應し難く勿論是以 大君殿下に言上之上廻報ニ及ふべけれと  
も不取敢返書旁々此段申入候拜具謹言

一松平修理太夫に命令

此節神奈川表渡來の英國軍艦水師提督薩州表に相廻り品々申上度有之  
様國元公使申立候右ハ 外國人接待之地ニ無之候ニ付説得爲致候得共  
難計候間此度爲心得修理太夫家來□可達候事

○同廿二日

一大和國神武御陵に今度初る 勅使參向之旨被 仰出今日發輿 勅使

德大寺大納言奉行萬里小路辨

一此頃洛中外所々ニ於て浮浪之徒強暴奸姪之儀度々有之風説畧す

○同廿三日

一加賀中納言出京旅館建仁寺

○同廿四日



一長岡良之助京都出立歸國

一天朝御沙汰

大原三位

去年爲 勅使下向之節不容易事件有之其罪不輕依之辭官落飾蟄居被仰付候事

裏辻侍從

攘夷之事件ニ付 殿下一已之御趣意未決之儀妄ニ諸藩へ致流布一條不容易儀ニ付近習御番御免列之事

依祖父御咎差扣之事

大原備後權介

依父御咎差扣之事

裏辻大夫

一三條河原へ足利三將軍之木像首を梟し捨札之寫

逆賊足利十五代

此者共之惡逆ハ已ニ先哲之所辨駁萬人之能所知にして今更申すに及すと雖此度此影像ともを令斬戮ニ付而ハ贅言ながら抑此大皇國の大道ヲ

るや忠義之二字を以其大本とするは神代已來の御風習なるを賊魁鎌倉頼朝世に出て奉惱 朝廷不臣の手始をいたし尋て北條足利ニ至てハ其罪惡實不可容天地神人與に誅する所也雖然當時天下錯亂名分紛擾之世朝廷御微力にして御罪を糺し給ふ事能ハす遺憾豈可不悲泣や今彼等か遺物等を見るに至り而も具ニ奮激に堪す我々不敏なりといへとも五百年昔之世ニ出たらんニハ生首引拔んものをと握拳切齒片時も止事能ハす今や萬事復古舊弊一新之時運遂ニ不臣之奴原之罪科を正すへきの機會也故ニ我々申合先其巨賊之大罪を罰し大義之名分を明さんが爲昨夜等持院ニ有る所の尊氏始其子孫の奴原影像を取出し首を刎て是を梟首し聊散舊來之蓄憤者也

大將軍織田信長公の爲に右之賊統斷滅す些か愉快といふへし然るに夫より爾來今日に至り此奸賊ニ猶超過し候者あり其黨許多にして其罪惡を悔ひ忠節を抽て鎌倉以來之惡弊を掃攘し 朝廷を奉補佐て古昔に復



し積罪を贖ふの處置なくんば滿天下之有志追々大擧して可糺罪科者也  
右三首さらし置もの若取捨候者ハ急度可行罪科者也

初代等持院殿尊氏

二代寶篋院殿義詮

三代鹿苑院殿義滿

○同廿五日

一中川修理太夫松平主殿頭毛利左京亮京都出立歸國

○同廿六日

一尾張殿一橋殿越前侯ハ言上

昨戌年八月 勅使付添島津三郎江戸出立之節英吉利人兩人打果し候ニ  
付英吉利人應接方も有之ニ付其節之始末存居候者呼出し理非相糺可申  
旨相達候處未差出候内英國ハ軍艦差向直様戰爭ニ可及旨且 將軍留守  
中之儀故京都迄承リニ差越候積りを以申立候日ハ廿日相待返答無之候

ハ、直様戰爭仕懸可申書面ニ御坐候右廿日ハ三月八日ニ相當り申立候  
趣は素より難承届儀ニ付何れにも戰爭ニ及候は必然ニ付別ハ大坂湊之  
儀ハ早々警衛可致依而先諸大名夫々ハ差遣候様仕度江戸之儀ハ 和宮  
御方御在城之儀ニ有之留守中少人數ニ而ハ守衛難行届夫々手配り申付  
度右ニ付水戸中納言義最早旅中と存候間早々引歸し江戸守衛可致旨申  
遣度奉存候

右は旅中故不取敢此段奉言上候以上

一英船渡來ニ付慶勝慶喜慶永容保豐信尾一橋越會士ハ

此節横濱港へ英船渡來仕昨年島津三郎江戸出立之節於生麥家來之者英  
人を殺し候儀ニ付三ヶ條之申立何レも難聞届候付其趣を以應接之心得  
ニ御坐候ニ付而は速ニ可開兵端をも難計候間諸大名銘々藩屏之任相立  
候様表向海國之者へ御暇被仰付候様仕度奉存候得共猶 叡慮如何可被  
爲在候哉奉伺候以上



○同廿七日

一攘夷御一決ニ付 伊勢神宮へ奉幣使參向三月十日京地御發足之段被  
仰出候事

奉行 藤波三位

右之段被 仰出候處英國軍艦渡來不遠可開兵端を時節ニ及候付差急  
發足之旨被 仰出候事

參向之公卿 柳原左衛門督

橋本侍 從右三月三日御發足相成候事

一今晚三條通西洞院西へ入苧問屋渡世綿屋小兵衛衣棚通二條北へ入三輪  
田綱一郎宅等へ會津侯且町奉行組々數百人同時ニ手鎗持其外得物携押  
寄以楮子屋根へ揚り裏戸口へ瓦投落し下々之寄手表戸打破り寢込へ仕  
掛敵人數多少難分ゆへ居宅之八方取巻敵も死物狂暫血戰寄手碎心魂終  
浪人共召捕即刻會津侯旅館へ引行候未ノ刻過町奉行所へ引渡候由寄手

手疵受候者も有之哉之風聞

浪人名前

衣棚通二條北へ入 諸岡節齋 青柳健之助 三輪田綱一郎 木屋町三條北へ入 龜屋某方止  
三輪田綱一郎方同居 宿長澤 誠 下總國相馬郡宮和田村前三輪田雄太郎 常州牛飼右 門方同居 建部建一郎  
東三本 大場匡平 三條通西洞院西へ入 綿屋小兵衛侍 長尾郁三郎 三輪田 方同居 高松趙之助死骸  
計首 仙石佐太雄

右之外同類も有之候趣ニ候得共未召捕ニ不相成候事  
足利三將軍之木像梟首致し候者共之儀ニ付京都御觸

當月廿二日 夜 尊王之名義を假り私意を以横行ニ及足利三將軍木  
像之首拔取梟首致し種々雜言を書顯候聞有之候者共召捕候畢竟 朝  
廷官位之重を不憚奉輕蔑 天朝をし致宥免難相成猶吟味之上罪科ニ  
可處事ニ候乍去精忠正義實ニ尊攘を志し候者共於 朝廷固より被遊  
御満足 幕府ニても御採用相成候事ニ候得は聊無疑心愈忠義を勵心



得違無之様一統へ急度可申聞候事

一右ニ付守護職を關白殿へ差出候書付

當月廿二日夜外尊王之大義ニ託し實ハ私意を以横行ニ及ひ足利尊氏義詮義滿三將軍之木像首を拔取剩梟首致し候聞有之者共召捕畢竟暴虐之振舞墓を發き尸を鞭にひとしくいはんや尊氏は贈從一位太政大臣義詮ハ正二位大納言義滿は從一位太政大臣迄も被贈候義尊氏ニ於て紛々議論も有之候得共彼等存意有之上ハ此節於朝廷言路洞發被遊草莽微臣亂妨に及ひ加之種々雜言等書顯し當世を誹謗し諸人を誑惑致し候段第一蔑天朝不敬幕府重々不届ニ候故召捕候儀ニ御坐候此段奉申上候以上

一右ニ付松平長門守建白

先般等持院足利之木像梟首仕候浪士之者被召捕入牢仕候儀承及候右之者盡忠報國之爲ニ滞在し攘夷之期限を待兼一時も偷安すへからさるニ

付憂憤之あまり足利氏之逆謀を相惡ミ名分を明ニ仕度所存より起り候儀ニ而聊私意を抱候儀ニハ無之と熟察仕候何分大赦被仰付候様伏而奉願上候若官位之者を斬首仕候儀朝廷を輕蔑仕候儀に相當り大赦不被爲行候ハ、昨年大赦之内井伊掃部頭を打取候者朝廷輕蔑之心毛頭無之皆々精忠之者ニて全掃部頭大逆を惡ミ國家之御爲ニ仕候儀ニ御坐候間於朝廷深高大之御仁恕被爲在大赦被爲行候御儀ニ奉存候此度浪士之者共只管足利氏之大逆相正起り候儀ニ付掃部頭を打取り候も同様ニ御坐候然は我等愚考仕候ニハ名分明成御時節ニ付如何成戴官位候者とても罪惡有之候ハ、貶黜被仰出無官之者ニ而も忠勤を盡し候者ハ褒美被爲行度奉存候左無候ハ、戴官位之者は惡事いたしかちに相成無官之者忠勤を盡候而も戴官位候罪惡者ニ劣候様成行可申と奉存候補中將之精忠貫日月其遺德たる今に至るも仰き慕さる者無之候付萬世之龜鑑にも被爲遊嘉永中和氣清麻呂公ニ護王大明神と被爲贈之御例を以



出等之御贈官被 仰出候様仕度奉存候足利義滿恐多も太上天皇之借稱  
候位牌鹿苑寺ニ嚴然有之候實に大道無道不可容天地候ニ付借稱之位牌  
御取上封爵被爲削亂臣賊子を懲しめ忠臣孝士を勸め聖明高大之御教道  
被爲行候ハ、天下有志之者不堪感激奮興之至奉存候彌 神州御威光海  
外ニ相輝き可申候既ニ夷艦横濱へ借入仕攝海ニ相廻り候も難斗一日も  
早く掃攘可仕時ニ至入牢日月相送り報國之志も空敷相成候事ハ彼等か  
爲幾重にも歎敷奉存候付何卒高大之御仁恕を以 大赦被 仰出候様伏  
而奉希候恐惶々々頓首 三月二日

一松平春嶽言上書

去月召捕候浪士之輩正議之聞有之候處其儘ニ相成候而ハ人心騷擾いた  
し候間早々出牢可爲致旨被 仰下候得共右正議之聞御聞取之廉如何之  
筋ニ候哉不存候得共此度召捕候者奉對 朝廷ハ罪狀有之候事ニ候間出  
牢爲致候儀難相叶候且人心騷擾致し候趣も不得其意儀も有之正義之徒

におゐてハ素より騷擾いたす間敷と存候右様之所業ニ及候者全不正之  
徒ニ付御心痛無之様人數等差出候儀ハ勿論如何様とも取鎮方爲致候間  
御任置相成候様いたし度候右御答迄候以上

三月五日

足利氏以後三人之木像首致梟首候付會津侯人數出張召捕ニ相成候處  
天朝ハ助命之 御沙汰有之ニ付左之通御預

- 京極飛驒守へ 三輪田綱一郎
- 土方髯千代へ 宮和田勇太郎
- 松平伊賀守へ 大師岡節平齋
- 西尾鎌之助へ 長澤眞左登
- 小笠原右衛門佐へ 野呂久左衛門

一在京諸大名へ 天朝御沙汰  
此度横濱へ英吉利軍艦渡來昨年島津三郎家來儀英吉利人を殺害ニ及候



儀ニ付三ヶ條之儀申立何れも難聞届候筋ニ付其趣を以可應接候間速ニ兵端を開候哉難計仍而ハ銘々藩屏之任ニ有之候付備向手當も可有之旨爲心得相達候事

此添書ハ一  
橋越前會津  
侯等御上  
洛御途中迄  
差上之添書  
なるへし

添書 關八州之諸大名も早々被 召寄候方可然と奉存候筈本へも心得方可被 仰付候實ハ若年寄始要路御役人ハ勿論諸番頭等別而厚相心得候様可然御取計可被成候以上

尙々吳々竹本甲斐守を以申上候通日延之御應接肝要と奉存候

一御老中兩人桑名驛ハ江戸御老中(註)是書翰ハ水野板倉兩人ヨリ江戸留之書翰

守老中松平井上ニ送リタルモノ本書

宛名署名ノ  
位置願倒ス

上ノ極密 水野和泉守

松平豊前守

板倉周防守

井上河内守

一翰拜啓仕候春暖之砌先以 公方様益御機嫌能被遊御旅行今晚桑名驛□泊御同意恐悅至極奉存候其御地 上々様益御機嫌能恐悅奉存候

次各様彌御安泰奉賀候然ハ酉刻京都ハ別紙之通申來候則書翰不殘急飛脚を以御廻申上候間御披見可被成候何分戰爭御決著之外無之勢ニ候得共其期日迄手を空相待候は餘り無策ニ有之今一度も條理を立人心唯今之如く相成居候勢を御説得應接御盡し候上ニて不事成共素より戰爭ハ案中之事ニ付無據と致し死力を以應接爲致方可然と京都ニ而御評決之趣至極御尤之事則御供之小生共初役人共同意既竹本甲斐守早々歸府被 仰付委細同人ハ御承知可被成何分再々應も以條理御應接專一と奉存候厚く御勘考御取計可被成候廿六日 御奏聞ニ相成候趣ニ候得ハ其御模様も不日ニ相分可申候さすれハ早々可申上候何分右等ニ無御拘極意戰爭と斷然御決心にて御應接有之候様吳々も所希と御心痛之段ハ山々御察申上候實ニ不容易御時節御同意恐入候而已御座候併ヶ様事々切迫ニ相成上下一統も死地ニ陥候得共所謂萬死を出て一生之場又御回復ニ可相成と奉存候御同前ニ彌々必死之覺悟



外無御坐候水戸殿ハ御旅中迄早々御達し申心得ニ御座候御地御警衛之義ハ厚く御談御取計可被成候海岸ハ御固メとも只々海岸へ人數居置彼之的ニ相成候様之拙なる事にてハ不相成候先年渡來の節振合ニ拘り被成候ハ自然其論も可起哉と爲念申上候品川驛迄必燒拂可申とも存候彼より不燒拂先ニ此方ニハ人民可然處へ移し然る後此方にて先ニ燒候方可然と奉存候總而防禦之策略も夫々御評議可被成候尙心得候儀も有之候ハ、早々可申上候

一廿四日附之御書面廿七日相達拜讀仕候外夷拒絕之義ニ付御見込之趣被仰下尙若年寄三奉行大目附御目付見込書も御廻し被下御尤之儀ニ奉存候乍去京地之御模様如何哉何分にも早々京地へ相廻可申候先々此段早々申上候委細右京地よりの書類にて篤と御承知可被下候餘後音萬々可申上候恐惶謹言

二月廿八日夜

桑名驛ニ而認

再白隨時折角御自愛專一ニ奉存候東禪寺之二万ポンド之儀も最早六ヶ敷奉存候京地にて肥後守并市中打合浪人召捕之者近來之手際愉快之事ニ御坐候併右様之人氣故御上洛も深く心痛最早不日ニ御京著ニ相成候儀兩人申合心痛仕候御察可被下候先々今日迄ハ兩人始御供末々迄無難ニ候間御放念可被下候早々頓首

○同廿八日

一鍋島中將島津淡路守南部美濃守

右之面々來ル晦日巳ノ刻參 内之旨被 仰出候

○同廿九日

一天朝御沙汰

勅使 伊勢へ來ル三月三日發足勵精心夷船退帆祈念可有之旨被 仰出候事



三月四日 石清水加茂兩社へ 宣命使參向之旨被 仰出候事

石清水 勅使 庭田中納言 加茂兩社 勅使 德大寺中納言

攘夷御祈願加茂下上社へ 行幸被 仰出候事

但三月十一日頃之由

阿州侯に之被 仰渡

頃日横濱英夷軍艦渡來不容易形勢不日開兵端候哉之旨攝海邊渡來も難計趣非常急務之御時節ニ付賜御暇候間早々持場の罷越防禦盡力可有之 御沙汰之事

御所司職を桑名侯へ夷船渡來ニ付早々國許へ引取手當致候様御達之處御不承知ニ何分 御上洛ニ付警衛被 仰付候處 御上洛御延引無之候而ハ難引取被 仰達候間又々暫時御滯京ニ相成候由

和宮様駿府御住居水戸家に御守護被 仰付候間上京不致候旨江戸より言上有之候由

一松平長門守建白

先般加茂泉涌寺への 御參詣は御親征御巡狩之御基本ニ可有之段及言上候處如何にも時勢切迫夷艦攝海ニ不日潜入仕候様實以 皇國之安危此時ニ相決候事ニ付防禦之者共決闘死戰仕候は勿論ニ候得共如此時勢乍恐至尊深宮ニ被爲在候様も無之膺懲之御偉業不被爲立候てハ不相叶義ニ候付何卒鳳輦を男山へ御進天下之士氣を被爲遊 御淬勵候ハ、畿内ニ馳走蟬集仕禦防之士も益感奮仕らぬもの有之間敷奉存候左様無之而ハ攝海は必争之地ニ付賊之有共相成可申候歟いかにも 列聖ニ被爲對不容易御時勢御親征之震斷有之度爲神州奉翼候  
一 中川宮を申立にて横濱燒拂異人足留り不相成候様御内意有之由右ニ付  
廿七日俄ニ一橋殿御參 内ニ而御理解之上燒拂暫御猶豫相成候由右之  
一條ニ付 御所向御取込之由之事

○二月晦日



- 一 松平長門守京都出立攝州兵庫表へ出張
- 一 毛利淡路守京都出立歸國
- 一 京都諸聞書
- 一 近衛殿の尾張殿へ繁文之御冠袴御狩衣被贈之
- 一 一條殿の肥後侯へ右同斷之由
- 一 二條殿の因州佐竹兩侯へ右同斷之由
- 一 高倉家の佐竹侯へ風折烏帽子單狩衣被贈之由
- 一 徳大寺内府公の加藤出羽守へ繁文之御冠紙捻共同斷
- 一 近衛公の仙臺侯上京之上繁文之御冠袴御狩衣同斷
- 一 高倉家の將軍家 御上洛之上御衣冠諸具被進筈之由
- 一 雲州侯出京旅館自分屋敷
- 一 松平豊後守出京同東禪寺
- 一 大佛阿彌陀か峯ニ石頃日之大炮調練有之

一 敏宮御所へ四月廿三日御移徙被 仰出之

一 松平安藝守上京以前 殿下の奏書但上京は當月初旬也前記之

公武御合躰御長久之義諸藩會議可仕私義も何卒御會議之上彌以公武萬世不動之基相立候様周旋依之 御上洛之節江戸へ相殘候てハ周旋相蒙候詮も無之御座候間供奉仕度段申出候處去月十三日申上候通相調候付同廿日江戸發足來ル九日上京佛光寺へ止宿仕候筈ニ御坐候此段以使者申上候

一 松平主殿頭在京中 天朝御沙汰書

今般攘夷御一決ニ付早々長崎表へ罷越奉行へも談判 叡旨貫徹之様周旋仕領分海岸防禦も精々可致手配旨誠忠之志情御感之 御沙汰之事

一 中川修理太夫の右同斷傳奏野宮殿の御達

先達而御臺場新築被 仰付置候處造作之場所得失御衆議難決候今般御臺場之儀ハ御止メ萬一非常之節ハ御警衛人數□□ニ爲差登候様兼而手



配可致旨 御沙汰候事

一右同侯參 内之上野宮家方被 召御沙汰事

非常之節御警衛人數速ニ爲差登候様豫手配可致置過日御沙汰ニ付人數并心得方等以書面伺有之候通可然様小河彌右衛門以下引率一先歸國候様賜御暇之旨 御沙汰之事

右松平主殿頭中川修理太夫兩侯廿五日京都出立歸國之事前ニ記之

一諸侯追々上京殿下始御役卿方へ音物勤向届書等之諸聞書ハ數多有之候得共略之

一京都御禮節御改御沙汰

關白 大臣 宮方へ

乘輿之納言 不下乘 參議以下下乘禮節歩行之公卿殿上人是迄之通禮節

攝家納言以下へ

公卿乘輿行違無禮節 殿上人下乘禮節

攝家殿上人

乘輿之節公卿行違

但し公卿歩行之節攝家下乘禮節

殿上人乘輿步行共行違無禮節

堂 上 公卿是迄之通相互禮節 歩行之殿上人ニ逢無禮節

殿上人 是迄之通相互ニ禮節歩行之公卿ニ逢下乘禮節

六位藏人 是迄之通

攝家門跡

僧 正 公卿殿上人乘輿步行共行違無禮節

僧 都 歩行之公卿ニ逢下乘禮節殿上人ニ逢行違無禮節

本願寺以下同列

僧 正 乘輿之公卿ニ逢行違無禮節 歩行之公卿ニ逢行違下乘禮節



歩行之殿上人ニ逢行違不禮節

僧都 乘輿之公卿ニ逢行違不禮節 歩行之公卿ニ逢行違不禮節

歩之殿上人ニ逢下乘禮節

德川家 依時之官位禮節

諸大名 高家 堂上同格相互ニ禮節

非藏人 地下官人 旗本 公武諸家家來以上堂上并諸大名ニ逢時下

乘下馬

但供之時同斷

肩衣小袴着用之堂上逢之輩不及下乘下馬

羽織着用之諸大名行違之節堂上不及禮節尤羽織躰之諸大名ハ下乘

下馬禮節可有之事

一天朝御沙汰 議奏衆方

攘夷拒絶之期限於一定ハ闔國之人民戮力可勵忠誠ハ勿論之儀ニ候先年

來有志之輩以忠誠報國之純忠致周旋候儀 叡慮不斜候依之猶又被洞開  
言路雖草莽微賤之言達 叡聞忠告至當之論不倫沒壅塞様と之深重之  
思召ニ候間各不韜忠言學習院へ參上御用掛之人々ハ可揚言被 仰出候  
間亂雜之儀無之様相心得可申出候事

連日從巳ノ刻限申ノ刻ニ於九ノ日廿六日ハ從午ノ刻限申ノ刻ニ

一右學習院御用掛人名三月之所ニ記す



元治元甲子年日記

自十一月二十五日  
至十二月二十八日

○十一月十五日

天氣暮ニ黒谷發伏見ニ而待合夜半過乘船十六日五ツ頃八軒播權方へ著食  
事仕舞太丸ニ詔物いたし藏屋敷へ越ス同日暮前鈴木氏柴氏着同夜京師へ  
飛脚差起ス

○同十七日

朝陰ル夫々天氣飯田氏湯治方戻リニ而今朝乘船京ニ歸ル 昨夜之飛脚四  
ツ時過戻ル晝前新撰組勇銀藏來ル酒差出ス八ツ半頃出起本所之渡細之渡  
を越ス此節日沒ス尼ヶ崎城下入口渡場有り同所ニ番所有之城下邊れ惣門  
内ニ番所有之往來を改ム城下方半里程行る月出五ツ半過頃西之宮へ著鈴木  
柴兵庫迄海路を取 木津屋勘助方へ泊



○同十八日

天氣明之出起明神を拜し後楠公廟を拜し前生田明神ニ詣辨慶之筆景季之歌を寫す時ニ紙入レへ落葉一葉落ル四ツ半前頃兵庫ニ至ル所へ鈴木氏柴氏尋候得共不相分こふべ中川家兵庫ハ明石藤堂半月持ニ而相固兵庫入口松平讚岐守様御人數ニ而固須磨寺見物上野山之額古器俗敦盛馬たらへと云寶開張古戰場一覽鹽屋村ニ至り引網見ル福祥寺之額慶長年中舞子濱御臺場側ニ一見暮ニ明石驛ニ著橋本や久右衛門へ止宿暮ニ小雨夜ニ入候而雨降ル

○同十九日雨

陸路を欲行とも兩人之者ニ任す乗船ニ取極晝後乘込ミ示談風雨を侵城下を廻見人丸社ニ登城下を見ル晝後風待之内臺場を見暮以前雷鳴夜半過雨止月明風待建曉之頃出帆用意頻也西北風ニ變

○同廿日

拂曉明石出帆天氣尤風景絶妙小豆嶋江嶋邊西ニ見ゆ暮以前小豆嶋近ニ至

ル夜小豆嶋ニ滯泊風止ミ漂ふ曉ニ至り漸小豆島を離れ四國高松備前岡山沖を過ル

○同廿一日

朝小陰西北風五ツ頃大槌小槌之北を過ル備之兒嶋沖を過ル頃々天氣午後小雨辰半備前境下津江を過臺場二ヶ所有り此邊小嶋數多有り風景急ち變し景數ふるニ隙なし未半刻頃鞆津ニ入津暮以前上陸阿彌陀寺ニ泊庭前梅花開を見る船中無事を祝す居民冠物を脱し禮をなす誠美風也

○同廿二日

朝陰ル九ツ半頃出起福山へ四ツ時着三浦へ逢之儀申入入口番所々案内ニ而本陣へ著同所ニ而晝食事仕舞誠之館へ案内者ニ而一同罷越談判酒食出ル關半左衛門荒井又太郎吉田助三郎等面會先師之祭ニ付拜禮藝周長之大圖を見る夜ニ入歸ル 老衆中へ書狀認關荒井等へ禮手紙差置其節幸便次第遣度様頼置候事晝頃小雨降ル修行御世話有之様子頻也城下家中宜○福

城南ニ向ふ  
肅々たり御  
大家中を廻り  
本陣ニ至ル  
其間馬場有  
其乘馬之者  
見人武之者  
數人往來  
之者數十人



ニ達ふ家中有り  
大家廿分も  
中少町家も  
能奇れいな  
も築地城南  
ニ登里

小野權之丞日記 (元治元年十一月)

七十

山ニ右左之通書付手ニ入

十一月十四日

一左之通御惣督尾老公ハ御達有之藝藩之者ハ廻狀ニ右諸陣へ通達有之  
毛利大膳父子事伏罪之姿も相顯候ニ付當月十八日攻懸り日限之儀重右一  
左右相達候迄攻懸り可被見合候事

元治元年

尾張前大納言

十一月十四日

以廻狀得御意候然ハ此度御參集之御藩御重役衆一人宛明晚六ツ時當所國  
秦寺へ御出立御座候様只今成瀬隼人正殿ハ御達御座候間早々御通達仕候  
様安藝守申付候間如此御座候

十一月十三日

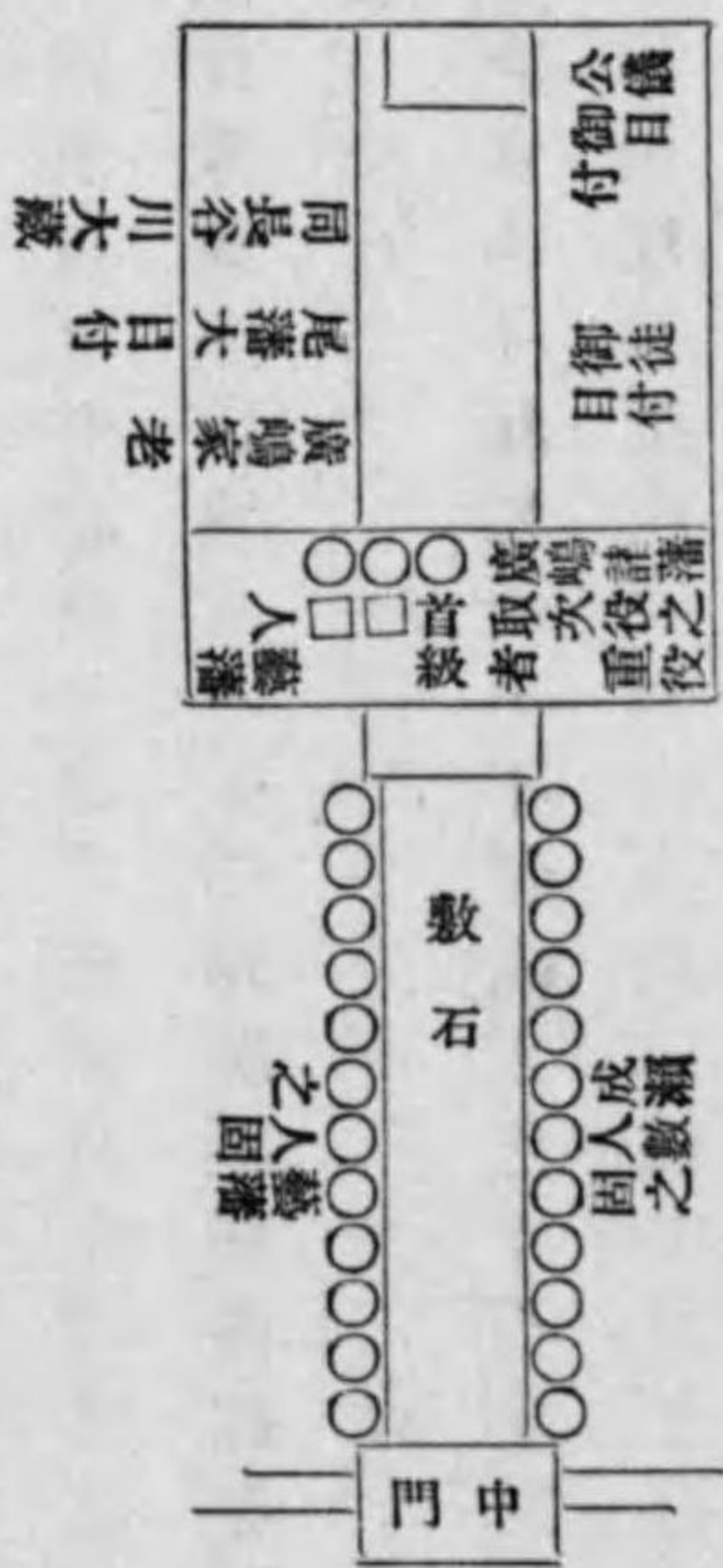
松平安藝守内

御名様御内

遠藤左兵衛  
堀江太左衛門

軍事御役人中様

追右陣羽織小袴著用御座候様との達有之候



御承知之通十八日迄ニハ敵境へ攻寄可申と兼々被仰渡有之候ニ付防藝國  
堺小瀬川邊下見之者差出陣營所先ツ玖波驛邊へ相極昨日當御先鋒二隊船  
にて操出し候積ニ御座候處其内長州伏罪之模様有之候ニ付攻寄期限相延  
可申哉之意味廣嶋重役迄將曹内々申聞候趣も有之候處明曉六時當所國秦  
寺へ諸藩重役壹人罷出候様呼出有之角左衛門罷出候處尾藩長谷川惣藏ハ  
今日長州之家老之首級差出候ニ付成瀬隼人正様實檢被致右ニ付御呼出候

小野權之丞日記 (元治元年十一月)

七十一



旨被申聞候尤實檢之式と申ては段々手續も有之候ニ付相略し本堂ニ成  
瀬隼人正様初諸家主役を別圖之通列座候上一通り見分いたし受取可申段  
申聞九ツ半時頃ニも可有之哉夫々列座之上長州家老志路安房巾小袖麻上  
下ニ相纏罷越三家老之首級長州使番と申體之仁附添外ニ長藩三人首級  
持出廣島藩取次役にも候哉首臺持出受取三級相達夫々何々誰首披露にし  
て志路安房等之進退實ニ恭順伏罪恐入候様子相顯候事ニ候因る攻寄候期  
限自然日延ニ可相成と専ら風聞御座候處暮六ツ時迄も一向御沙汰無之既  
ニ廣島家老上田主水ハ先手相纏被繰出候様子内意とハ大ニ違ひ當惑いた  
し候

御家ニ而も手後候ハ不相成と色々心配罷在候處大森操兵衛尾藩長谷川  
惣藏へ罷越御延引有無内々相尋候共只今藝之辻將曹呼出御延引之義廻狀  
ニて相達可申筈四國九州へ攻口期限延引申達候方差急き御覽之通使者相  
集メ其手筈ニ混雜罷在手後之旨承り罷歸候ニ付期限延引之旨夫ニ付聊

落付右操兵衛内々承り候事ニ而其後廻狀ニ別紙之通申來候事ニ御座候  
此後之處如何様之御所置ニ可相成哉難計候得共御惣督著城ニ而尙御實檢  
も可有之其上

天幕御伺之上ニ無之ハ御決評も相成間敷歟何れ數十日廣島表滯留罷在  
候事と被察候右ハ只今之様子爲御通用如此ニ御座候

尙々御惣督明十六日彌御著城之事ニ御座候就御用參府被仰出候奉書並ニ  
追討之義も人數殘置候様可致旨申候奉書相渡候付て御手前ハ早々發足と  
心得候様申被爲達候故ハ召被呼候御用之品も不相辨候得共最早戰期ニも  
相迫り候事ニ付此上成功之見留相立候も出足猶豫之義稻葉美濃守相達置  
候間其心得可有之候事

十一月

松平美濃守

去年脱走いたし是迄長州滯在之三條實美初五人之輩長州より受取壹人ツ



ッ御自分並細川越中守有馬中務大輔松平修理大夫松平肥前守へ預置咎候間夫々受取方難行届節ハ越中守初申合兵力を以速ニ臨機之處置可申渡候事

十一月

一茶烟草盆出候而干菓子高月へ盛候而出ル

一盃 一硯蓋 生海賊 車海老 あなご かげ焼 一吸物 蝶小味 岩茸

一砂鉢 平目さしみ とかさみり 一大平 大和いも

一鉢 うと 平目煮付 一井 せり 百合せん す味増合

御膳壹汁貳菜 をろし生か 一皿 蝶切身煮付

一汁 あなご

一平 かまほこ 蓮根 ゆば 大和いものり

本陣へ戻り候處門前へ阿部侯御設附之臺提灯二ツともし有り且供ニ越候者留守ニ残り候迄御酒御肴被下

一 先師御祭事之趣ニ付四人拜禮神酒頂戴

右長沼先師神位中、黒河内氏畫像左、先師右石碑石すり

一 廿三日御膳御酒被下供迄御酒共々被下

壹汁貳菜 一平はんへひ 一皿はんへい

酒 一硯蓋 あなご 蒲焼 岩茸 生海賊 蓮根

一砂鉢 平目さしみ しん菊 わさび 醬油

堺町一丁目芥川屋勘左衛門

○同廿三日

天氣朝寒明候而出起朝阿部公々御酒被下帽子峠福山安藝領境也正午尾道

ニ至ル宜敷驛也同所食事七ツ半時三原ニ著城を見物尾之早打ニ逢山科屋

武八郎方ニ泊

○同廿四日

天氣寒曉七ツ半以前出起日出後本郷ニ至ル大川土手を行事里餘也萩野村と云所より藝州之由帽子峠を經土途寒上水面水張會津之十月頃之如し辰



半刻頃を寒解して歩行ニ迷惑す峠を下て新城と云間之宿也酒を命する處  
肴なきニ付大根を葉共漬候ニ醬油を打懸ケ肴ニいたし給る會津之戸ノ口  
邊之茶屋之如し先ニ越候家來共雜煮有りて甘きよし申まゝに命候處最早  
賣切之由申候付脇店ニ行而食事<sup>□</sup>を欲するになしと云ニ寄て前驛を問ハ一  
里と云ふ溜り市と云所ニ至り食を問ふになしと云ふ新にたくべし哉とい  
ふ間取故向店ニ行て問ハ赤飯有りと云ふ命する處唐津之藩富田政右衛門  
來て談話する片時計同人歸り後食事赤飯一盃給候得ハ大勢故替りハなし  
白飯ハ有りと云ふまゝに飽候申半刻比西條驛<sup>欠元ノマ、</sup>方へ著泊今朝々二  
里不殘五十丁壹里也

○同廿五日

天氣曙出起大山峠有り海田前ニ數軒酒造店有家作懸り宜敷此邊ニ諸品  
背負或ハ會津之山はしこといふ様之ものニ背負候者を數々見ル但シ兩  
柱下之方ニ横木有り諸物を右木にて下へ下らぬ様ニいたし置也五十町壹

里五里半を行而八ツ時頃海田ニ至り食事す六七町行而小川之前ニ新ニ柵  
を出し假門を建門内番所有て往來を改む從夫二丁程行而兩方切立たる切  
所有右を行事數十丁ニして高ミカ城下見ゆ坂下る事十丁程ニして右ニ巖  
巖たる石山ニ松木繁茂す右を行事十丁程ニして城下入口ニ至ル同所ニも  
番所有之往來を改む海田より五十丁一里を行事二里ニして爰ニ至ル申之  
刻計ニ大畑庄<sup>京橋十内町脇本陣</sup>八方ニ至り宿所を依頼す大坂屋<sup>欠字マ、</sup>方ニ暮以前著す八  
疊之間へ品々差置候處屏風ニ而仕切上下を分ち其次之三疊へ下部を置一  
宿す 夜半後雨降

○同廿六日

朝一同談判天氣折々陰ル小雨も少々降ル朝食事後永井大監察へ柴氏一同  
參ル同所門前ニて當藩池田德太郎ニ柴氏面會歸り懸ケ同人旅宿ニ至り酒  
肴ニ預ル 留守之内晝前脇本陣大畑宿ニ轉宅ス座向宜始而數日之齋を散  
す夜五鼓半頃出火尾小部之居所小屋燒之由也



○同廿七日

陰晴不定晝前三宅分太夫方手紙遣す午後御進物之菓子誂從夫熊本藩中山左次衛門方へ參ル夜ニ入歸ル途中犬山藩本多彦三郎八木銀次郎ニ逢留守中右兩人尋來候由

○同廿八日

快晴今日轉宅之旨庄八申出ル尤行人も引逢候由申之晝前柴氏立見方へ出 今日備前家老池田出羽著候由夕刻ニ至リ旅宿可轉旨申出ル暮以前細工町不明屋正右衛門方ニ轉宿す追手郭門を去事三丁程也夜食ニ酒肴を差出ス肴三種也正右衛門ハ酒造店ニ而富有ニ相見ゆ下僕數人召遣ふ家作手廣也都合十疊三間六疊壹間ニ下夫居所を借用候而家内之居所差支無之取扱丁寧也

○同廿九日

天氣午後福山公の御使者一同相勤御用人内藤次郎左衛門ニ面會す御口上

申述御進物之菓子差上ル以同人御返答被仰出從夫西寺町明頂寺松山公御旅館へ一同御使者相勤辻七郎右衛門ニ面會御口上申述御進物之菓子差上ル 同人同道ニ而拜謁被 仰付種々御直答被仰合御尋等有之暮合退座歸宅す留守中肥後中山左次衛門來ルニ文字屋の酒肴を送ル肴すしニ一鹽之切身炙付肴大平豆ふニ甘くわいなり夜宿も酒肴差出ス鱈炙付と大平かいふ也

○同晦日

晴陰度々變す昨日申入置四ツ時當大守藝公の一同御使者相勤追手前應接所ニ而佐久間織衛と申ニ面會御口上申述御進物之菓子差上ル記置可申聞旨申す從夫戸川殿旅宿へ一同罷越用人欠字マ、面會御見舞之口上申述且逢之儀申入一同面會種々談判午過ル頃歸ル留守中福山老安藤織馬山岡治左衛門來ル昨日ニ文字屋の送ル所之肴ニ品仕舞置食事之砌相用飯未終ニ山岡復た來ル酒肴差出候處へ同藩齋藤甚右衛門藝三宅萬太夫來り一同酒肴給ル今朝出前中山左次衛門來客退座後尾田宮如雲方へ罷越暮而歸ル水之武田始歎



願之筋有之上京之道中之旨急飛ニ而尾々申越候旨承ル夜中雨降暖氣酒肴  
平出候

○十二月朔日

昨夜の雨暖氣小雨上り降不定益田勇來ル處同藩中山左次衛門江口純三郎  
馬淵慎助來ル酒肴差出大野又七郎來ル酒肴差出歸り後稻葉民部大輔様へ  
御使者一同相勤伊澤右馬允ニ面會拙者ハ御知り被下候付拜謁被仰付候旨  
ニ付相殘ル拜謁之上御線込之儀御建白被成候旨被仰申候復座之上田崎雄  
策も出應接從夫尾張様へ參上長谷川惣藏ニ面會御直書御見舞御菓子差上  
御返答ハ追而被仰出候旨ニ付歸ル暮過也然る處當所應接所ニ而對面之旨  
申來ル罷出候處戸島竹之丞面會此間之御返答書出一同へ金三百疋ッ、被  
下從夫兼約ニ付集會所へ出候處當藩三宅萬太夫岡田彦太郎黒田益之丞罷  
出吸物肴三種ニ而色々談話四ッ過ル頃歸ル取肴大平さし  
永井主水正殿へ御使者差向動之

○同二日

天氣折々陰ル安藤織馬辻七郎右衛門來ル酒肴差出候處立見鑑三郎金子權  
太郎富永太兵衛來ル長谷川惣藏より御返書可受取旨申來ル越前青山小三  
郎奈良元作來ル

○同三日

陰天折々小雨晝前一同尾張様へ出ル晝賄被下御返書惣藏方へ下ヶ置候旨  
ニ付歸ル成瀬様へ勤△水の面會午後松平上總介様へ出ル拜謁之上酒肴被下暮合歸ル長谷川へ參  
り候處未被下旨ニ付福山藩へ出ル安藤尋候處未退散無之旨ニ付不得止山  
岡相尋候處同斷也彼是之内下り候ニ付罷通り此間安藤ニ申談候事挨拶承  
其内ニ酒肴差出ス歸り候得は大野來り居ル

○同四日

陰晴不定朝食事後長谷川旅宿へ參り御返書受取金五百疋被下從夫大野又  
七郎方へ參り中山へ同藩旅宿承り候處淺井新九郎林新九郎益田勇罷在可  
通旨ニ付罷通ル酒肴出ル處川添彌右衛門來ル左次衛門ハ重役同道ニ付出



ル午過ル頃歸ル明日柴出起ニ付取込豫州松山藩藤野立馬來ル處へ唐津藩長谷川善兵衛備後松山藩伊藤泰輔柳井又郎來ル暮合過ル頃中山淺井林川添來ル柴へ暇乞之爲也右歸ル入變リニ桑名藩立見金子濱崎同斷ニ付來ルいづれへも酒肴差出ス夜中雨夜半過ル風

○同五日

終日雨水れ唐津藩尾崎嘉右衛門來ル大野も來ル柴四ツ時過ル頃出起同人朝大小監察へ出ル尾前様之咄次第有之京都公用人へ手紙其外言上之書尾前様御返書同人へ差出ス祐之進政之進四郎へ連名會津へ之手紙も相頼柴氏午過ル頃出帆之由也

○同六日

天氣朝食事早速永井殿へ出候處稻葉閣老へ被出懸候ニ付午後早速可出旨ニ付歸ル從夫豫州松山藩藤野立馬方へ參ル面會越前藩青山小三郎奈良元作へ尋候處留守也唐津藩尾崎嘉右衛門相尋候處是も留守也歸り候得ハ大

森操兵衛來り居候ニ付酒肴差出中へ永井殿の案内手紙來り候ニ付直ニ出ル長州家老毛利隱岐右添使目加田欠マ、昨日謝罪狀持參且末藩謝罪狀も持參之旨其外品々談判歸ル晝食ニ宿ニ而かきかい飯を設置したじをかけたは之さしみ之様ニいたしねきちんひすり生がのりにて給る珍らか也飯後福山藩安藤織馬方出ル吉田助右衛門内藤次郎右衛門齋藤甚右衛門も來ル酒肴馳走ニ成ル茶漬も出ル五ツ時頃歸ル鎗倉邊迄異人の御かし之旨承る

○同七日

天氣折々陰ル小雨降ル夜ニ入霞降久留米藩平塚勇吉本庄榮三郎來酒肴差出候處福山藩吉田助右衛門來ル酒肴同人歸り候處松山藩辻伊藤來ル酒肴菓子味淋酒壹瓶持參吳候終日ニ相成右之節武田伊賀守上京ニ付備前藩竹鼻孝吉尊之次第心得ニ相咄候今日も宿を酒肴出候安藤織馬の手紙來書付之通遣し吳候彼人共三人嚴島へ夜船ニ而參ル



○同八日

曉方より雪屋上白く成ル昨日方々寒さ増候而肌寒し天氣折々雪白ら付朝永井殿へ参り御治定之次第承り候處昨日ハ御惣督御逢可有之之處閣老御逢永夜ニ入候ニ付御逢無之否不相分旨被申候猶今日ハ分り可申候間分り次第案内有之筈也武田之様子承り候處是以聞セ丈り位ニ而別段ニハ聞入無之旨也同所ニテ細川中山淺井ニ面會中山申候ニハ今日諸家々老共午後ハ咄之旨咄候定而戻り宜旨被仰申候ニ而可有之候且又即今之御様子伺察候ニ迎も思召哉私共所存之様ニハ参り申間敷是も無據事ニ候乍去此上ハ閣老様始御役々急々彼地迄御越被成父子恐入慎罷在候次第御見届被成候而追討之廉か相立天幕御威光相立候様被成彌無相違御見切付候上ニハ諸家人數之内御歸し被成候而費弊ニ不相成候様御取計專要と存候旨論も有之候

越前家々老共戸川殿へ参り御惣督様ニ而段々御處置被仰聞候處委ニ承り

候得ハ随分當時御見込之御處置ニ而御追討御主意も相立可申と存候旨申候得ハ戸川殿被申候ハ前條同様之御運ニても無之候而ハ天幕御威光も相立申間敷と被論候處是へも成ル程と申候由明日ハ是と申見定も無之と被存候大野も参り居ル立見ニ面會書付相借り且武田之様子猶相さくり吳候様相頼候事大野長谷川來酒肴さし出ス

○同九日

陰天折々小雪降ル肌寒シ永井殿へ参ル朝之内越前青山小三郎來ル差置候て永井殿之宿之酒藏を一見晝時中汲を馳走ニ成ル大ニ味よし午後齋藤甚右衛門來ル明日出起之由唐津藩鈴木民輔も來ル酒肴兩人歸り薄暮頃爲暇乞福山本陣へ罷越齋藤へ面會從夫細川益田方ニ参り候處申刻以前出起之由ニ付歸宅候得は永井殿用人ハ手紙到來いたし居候ニ付罷越肥前藩佐野榮壽右衛門と申者酒給居馳走ニ成ル暮以前平塚勇吉來り金平糖一桶出惠ニ預ル



○同十日

快晴從朝永井殿へ參り書付共寫取晝食事出ル八ツ半時過頃歸ル右永井殿内へ齋藤甚右衛門の手紙到來今日八ツ時頃御逢ニ候間可相成ハ罷出候様との旨申來候ニ付歸早速罷出候處御逢有之御直答被仰出御次にて御菓子被下留守へ藤野立馬八木銀次郎本多彦三郎來ル當藩岡田喜太郎も參り居酒肴出ル夜亭主酒持參被下菓子を遣す宿ハ山鳥一羽一同へ送ル勝山藩黒川かすていらを送ル亭主ハ山鳥を送る

○同十一日

快晴阿部様今日御出船肥後藩二宮團助京師より著之趣ニ參り吳候晝後同人方へ參り淺井新九郎若井鍛吉と同船ニ參り今暮出帆之旨申す歸リニ加州藩岡田助右衛門方へ參ル暮而歸ル宿より送ル所之山鳥調理珍らか也大野七郎明後日出起之由ニ參ル夜中參ル一同酒給ル附人三人嚴嶋へ參詣として出帆

○同十二日

快晴青山小三郎來ル唐津藩鈴木民輔明日出起ニ付爲暇乞參ル京師ハ之書狀大野ニ相頼永井殿ハ長防へ爲見當被參候義治定之旨爲知參ル岡田助衛門ハ昨暮頼候京師之模様書參ル

○同十三日

快晴曙大野方へ爲暇乞參ル酒肴出ル備中松山藩中村季平村上堤ニ出會晝後三坂一同町中徘徊城中之様子一見候積り之處嚴重番人を置旅人を制す右不能候ニ付東照宮御宮並八幡宮饒津社へ詣歸ル暮以前也岡田助衛門參り鈴木松上總介殿へ參ル明日天神山へ詣候筈約束立歸ル

○同十四日

曉ハ雪模様ニ參り陰天ニ付朝食後五ツ半時頃出宅昨日鈴木約束之通松平上總介殿と天神山へ詣晴陰忽ちニ變し雪も折々白ら付鈴木持病發跡ハと申候付先ニ出ル一瓢を提重持參天神山之絶頂ニ至り上州と一同頂大石ニ登



り城下を望候處誠ニ大坂のこの方之城下と相見松樹ニさゝいられ城中之様子不相分候ニ付殘懷候處右頂を下り西南へ行事三四丁小山二ツ目を見らる旨ニ付上州と引分れ其處に至り城中之様子相窺候處悉相見城下も一目之間ニ見へ渡り東西壹里程南北壹里不足ニ相見其外諸山ハ勿論海中之小島目下ニ見へ渡り窟曲入交あたかも如益石右一見後下山天神社ニ至り食事之旨上州被申候ニ付下り候處澤間ニ兵糧相用被居候ニ付瓢と提重携ひ參り進す畢而歸路ニ趣未半刻頃歸宅入湯原八嚴島を歸ル嚴島詣之儀申談ス

○同十五日

陰晴時々變す松平三河守様御旅館へ干菓子持參一同御見舞之御使者相勤石川鎌之助ニ面會御口上申述候處以同人御返答被仰出四ツ時過頃歸ル右旅宿ニ而尋候淺井將監ニ出會上方之様子荒方相分る歸後永井殿へ參ル此度之御禮申述且上方之様子委敷御糺被下度段相願午後出宅草津を船にて

嚴島へ詣乗船以前月出風景甚宜五鼓半過頃着船正木屋へ一泊明候て阿波屋九助ニ轉ス雪少々積り屋上白シ

○同十六日

朝食事後彌山へ登り朝少々雪無程天氣又折々陰り雪白ら付登る事十八丁と云相應じ、驗路也案内者を相頼山案内壹朱社案内貳百銅と云二王門を頂迄三四丁靈山也頂を防州徳山長州之山々南西豫讃之山々迄西ニ當り見へ其外島々眼下ニ見へ絶美也右を下り嚴島社ニ詣所謂古社ニ而神さびたりいつにも戰然たる有様也清盛公之建立回廊誠ニ妙也右社地回廊迄鹽さし入候事殊妙也且回廊ハ勿論本社額數多ニ而見事ニ目も盡す山上山下ニ鹿多く居る人ニ馴る回廊中ニ當地ニ而制する處之雜品器盃しやくし屋ちよふし其外之物共ひさぐ有り木盃二ツを求む未半頃歸ル食事後町中爲一見出ル竈數大凡千家數七百餘也といふ當所ニ而バ諸物を不植皆城下を所仰也凡而之諸品皆以同然といふ平相國清盛清メ之釜とて三斗程之古物有底



ハ五寸計り破れたり右をのする處之鐵柱五寸角位之もの三本有り右之内  
壹本へ平清盛と銘有る其外文字有之候得共不分明彌山へ詣する時登る事  
四五丁ニして左上ニ白糸之瀧といふあり岩石より落ち下る事數丈なり  
高倉之宮先年御越し有りし時之御詠ニ

雲井より落くる瀧の白糸ニ契を結ふことぞうれしき

右高房卿執筆と云

山高ニ登れハのほる春の日にくり返し見れば白糸野瀧

と云歌竹内卿之詠也と云々頂きを下る事壹丁程ニして鐘有平宗盛卿奉  
納にして古物也治承年中之銘有

○同十七日

天氣晝後少々陰る朝食後御社へ詣十七日業事之御神事之旨ニ而大般若經  
轉讀右之壹冊間ニ奏樂有り右を一見又々古額共一覽之上市中遊歩以前歸  
ル奉納之武器共一見之旨申入候處今日ハ御神事ニ付斷有之候ニ付無據今

日ハ滯留ニ相極明朝五ツ時と相約す

○同十八日

雨天凌能辰半刻過ル頃ハ御寶物爲拜見御寶藏ハ一同罷越僧壹人社家壹人  
立會ニ而五六人ニ而出し入いたし右御寶物弘法大師之袈裟鈴とつこ 光  
明皇后御自筆紺字法華經弘法之自筆醍醐經全部細字箱入なり 安徳帝御  
生衣小弓矢平家奉納大般若經數卷鐵ニかぶせ蓋箱入ニ而美を盡したるも  
の也右之内ニ願文云々末ニ長寶二年九月 日弟子從二位行權中納言兼皇  
太皇后大夫平朝臣清盛敬白と自筆之由認有之前之方ニ 欠マ、 櫛筆仁  
安元年十一月十八日内大臣平朝臣清盛と認有ルものいかにも珍つらか也

一天國短刀

寛文十二年三月納之 松野平右衛門直良本ニハ因防花岡住人 一行平野村吉隆元朝臣寄附ヤキ先之方ニ二寸程有リ兵衛寄附と有

一行平

短刀金之鞘と云作り不殘同品ニ見ゆ

一尊氏朝臣短刀支作成但ヤキ無之

見ニ 一秀吉公刀毛利輝元公奉納光忠作 一西蓮刀毛利輝元卿寄附

一毛利輝元卿寄附陣刀大小也鞘異形ニ而龍を黒漆ニ而繪たり 一支成



刀宗盛と云 一菊一文字無銘 一國綱刀毛利輝元卿寄附 一信國刀太刀作 一吉光刀堅田 兵部少輔寄附太刀作 一信國刀同人寄附太刀作 一國俊國行兩作刀小早川隆景卿寄附 一國真長キ刀 一貞宗長刀 無銘寄附之人未詳 一新羅三郎義光鎧 一大内義隆鎧共非之

午後歸ル晝食後土產物調儀候上乘船江湯と云所ニ不至して鹽干ニ付船滯戌半刻頃々又々出船子之刻前頃歸著黒田益之丞猪肉送り置し

○同十九日

天氣ニ成ル朝食事後永井殿へ參ル上方之様子並長州之様子承ル上方ハ別紙之通長州ハ今日方片著之日並ニ付兩三日ニハ左右可分旨被申候同所ニ而辻並立見川村此面ニ面會書付を借ル午食ニ黒田送ル所之猪肉相用未過ル頃々尾崎嘉右衛門ニ出酒食差出暮ニ歸ル永井殿ニ而柴上方之様子承ル

○同廿日

天氣朝食事後越前藩青山小三郎方へ參ル今日乘船小倉表へ戻り之由所々

廻勤之處皆留守ニ付歸リニ唐紙調儀午後鞘之手入

○同廿一日

陰寒久留米藩<sup>欠</sup>、榮三郎方へ參ル酒食馳走ニ成ル昨夜々鈴持病ニ而難儀夜半亭主方參り馳走ニ成ル

○同廿二日

天氣早元柴氏下著京都之様子 上様追々御順快御月額も被遊候由一橋様爲追討大津ニ御出張耕雲齊始ハ越前今庄ニ屯集候由京市中靜謐之由晝前永井殿へ參ル同所ニ而有馬遠江守様御家老有馬四郎右衛門ニ面會有馬奎ニハ途中ニ而出會之由咄いたし候午後尾崎嘉右衛門方へ爲暇乞罷越酒肴ニ預ル本庄榮三郎も來り奥御祐筆<sup>欠</sup>、<sup>衆</sup>も來會嘉右衛門方練よふかん留守中ニ到來ス同人夕刻小倉表迄戻り候由申ス久留米田中紋次郎今日著之由也大森操兵衛中山左次衛門來候由也面會なし

○同廿三日



天氣朝食後越前奧村且藏來ル從夫久留米田中紋次郎來酒肴差出ス所へ立見鑑三郎川村此面來ル柴面會一同酒給ル夜中中山左次衛門今霄可參旨申來ル仍而同人方へ罷越夜半頃歸ル

○同廿四日

天氣午後陰ル風邪氣九州地へ可參旨取極

○同廿五日

天氣京へ之書狀認暮頃中山左次右衛門林新九郎來夜半迄酒給ル船才判

○同廿六日

天氣朝永井殿へ鈴木一同參ル起候支度等致す

○同廿七日

天氣爲暇乞福山陣中へ參ル酒給ル從夫肥後久留米板倉様藩辻伊藤松平上總守殿へ爲暇乞參り食事ニ歸候處辻川村爲暇乞參ル食事後永井殿戸川殿淺井へ爲暇乞參ル船調向參候ニ付夜食後五ツ時過頃出宅福山黒川嘉右衛

門ニ一同酒振舞四ツ半時江場へ乗船同夜船中ニ而夜を明ス船名朝吉丸

○同廿八日

天氣辰之刻過る頃出帆靜ニて船不進櫓にて進四方山々見へ渡り景也午後嚴島南を經同所ニ而船を漕寄船共水を入ル未之半刻頃乾之風出帆を上ル少々横帆に而左へ少々傾けり船行之事速也忽嚴島を離れ申半刻頃岩國城下沖を過ぎ薄暮岩國領過半先へ至ル酉之半刻頃右領分出離る上ノ關過ル頃ハ丑ノ刻頃也同所迄廣島ハ二十五里と云笠戸と云ふ所ニ而夜明ル曉ニ至り月出弓張ニ而妙なり此邊ハ伊豫之出先之山々並豊後小富士始山々左ニ見へツル岬之方位も相分ル午以前中ノ關沖を過ル明離れ而ハ追々風靜也午後ニ至り豊前之山々ニ赤馬下ノ關邊西ニ見ユ快晴風益々靜ニ而未半刻ハ櫓ニ而進岩國領ニ入候而より山々中腹上迄島ニ削り候而見ユ長州沖ニ至り候而望山々防州山々ハ少々下き様見ユ船之屋上ニ四方を望ニ左ハ九州右ハ防長之諸山相連り殊ニ晴れやかに迎ひたるに春至りし心地し



て俄ニ長閑ニ成り屋上にて一瓢催し此年之僅二時ニ不満ニなりしも忘れ  
これてうかる斗り也風景天氣我苦を去らしむスモミサキニ不至事半里計  
ニして日暮此以前風辰巳ニ變す夜中狐崎山下を経て此山ニ而目印ニ焚火  
す此頃ニ至て風止て船不進櫓ニて進戌半刻頃雨少々降ル豊前田之浦ニ至  
て泊す暖氣

慶應元乙丑年日記

自正月元  
至同十七日

○正月元旦

天氣快晴暖天明船支度して直ニ出帆此浦ニ異國造船四艘其外大小之船數  
多泊す前田之邊差向ニ見ゆ行事里半計ニして馬關ニ至る臺場いつれも破  
られし體ニ見ゆ下之關も焼れて見ゆ左之方ハ門司之關と云萬字嶋右ニ見  
ゆ無程して内裡ニ至る左ニ見て辰之刻前城下入口ニ至ル兩岸ニ臺場有り  
西之臺場大也此邊カして内裡迄之間々兩岸屈曲して幅狭く頗る要地也番  
所有る不許入宿所定而後宿より案内なき内ハ入事不叶といふ仍而貳人走  
らし宿を定む彼是之内午ニ至らんと船子午食可設哉と伺出候ニ付命す船  
中ニ食事仕舞候頃漸宿所定まり候ニ付寺町岩井屋清兵衛といふ宅ニ至り  
午半刻過ル頃也從夫菓子屋を呼被進之菓子共命す越前藩兵士等ニ可有之



七鼓頃隣店前店にて頻りニけんを打歌を唱ふ其聲かまひすしく陣中之心入悪しさ様ニ相響氣之毒之體<sup>欠マ</sup>酒を命じ一同興を催す肴ハ舊臘廿五日ハ生魚皆々鹽物也といふよをくくにして無鹽<sup>欠マ</sup>意を得たり小きむきミかいと取交ちさミ青ミを加へて鹽にて出す外煮大豆と取肴にんじん午房結びこぶニぼふたらの煮付と盛合也蛤有鹽のつゆもの也下々迄酒爲給候

○同二日

陰ル午頃山田平右衛門來ル酒差出ス申付候菓子出來候ニ付一同細川良之助様御旅宿へ相勤永田武左衛門ニ面會御口上申述御留守ニ付戻ル從夫長谷川仁右衛門方へ參り夜ニ入歸ル良之助様明日御起也と云々夜半頃良之助様御家來生田藏助額田<sup>欠マ</sup>方手紙來明日五ツ時御供揃ニ御發足ニ候間右刻限迄ニ參り候様と之事也參上之旨返事遣ス

○同三日

終日雨天卯之半刻過出宅良之助様御本陣<sup>欠マ</sup>へ參上額田<sup>欠マ</sup>ニ面會依

手紙差上候而申達候處無程御達有之旨同人申聞候待居候内越前藩毛受鹿之助參り無程酒井十之丞も來ル當番家老之由小高民部も來ル始而面會也無程額田案内ニて良之助様へ被召出御直答被仰出其外御密話共被仰聞相濟候て越前藩兩人も被召出小宮も不苦ハと申しニ相成候處引取候由也都合三人御前ニて吸物御酒被下拙者へ御盃被下從夫酒井十之丞へ被下右御盃を鹿之助頂戴同人ハ御返盃申上候程見計候而退座御次ニ可給旨被仰御肴之内さし味を下ケ候而可被下哉之旨御近習ニ伺其通と御沙汰ニ而下ル其次ニ而長谷川仁右衛門亭主ニ而酒井毛受一同酒戴き御起ニ相成候頃見計ひ御道筋へ三人居御見送いたし候處其四人中程ニ不至處ニ而御床机御懸り被成候而早速御玄關前兩側ニ而二人ツ、並居螺を立候事三聲終而右之者共退き候哉否御駕を横ニ付ル早速御乘込ニ相成候哉否太鼓を起し之様ニ打出し其内御乘込ニ而御駕上ル程能打切候て跡ハ三ツ拍子ニゆるく打居ル程見計ひ仁右衛門ニ暇乞いたし歸ル晝後當小笠原様へ之御



使者一同相勤候ニ付申入候處外ニ客來有之趣ニ而猶從先方案內有之筈ニ申來ル案内を相待候處申之半刻過ル頃案内有之候ニ付三坂柴一同罷出鈴木ハ持病氣にて不出然る處城南ニ當り半里程有之候郡代屋敷と申へ案内いたし候半途少々先キニ而提灯ニ火を付ル右屋敷玄關へ力持之者銘々ニ出候而熊谷彈助と申者案内いたし席へ通せ茶烟草盃出ル右之處ニて山田平右衛門出ル從夫御口上可申述旨申候得ハ右席之上之間へ案内いたし候ニ付御口上取繕平右衛門ニ申述畢而復座右之處高つきへ盛候干菓子出ル無程吸物御酒肴八寸後ニ盛替硯蓋ニ成ル大砂鉢差味鯛と外ニ小切ニ煮付候肴有リ大平かもし里せりも小切ニ外ニ別段吸物出鴨おろしあはひすかひ別段ニ杉生募持合之由ニ而猪肉さし出終而一汁三菜ニ而物鯛之御焼御膳被下亥之刻頃退く侍へ貳朱ッ朱ッ食料被下歸り之途中へ久徳與十郎ハ手紙來り是非逢度由也仍而直ニ立寄候處通する間席無之旨ニ付三坂宿所へ同道曉ニ達する頃迄酒給候處過刻ハ之醉ニ付迷惑いたし候故相斷先ニ歸ル

○同四日

終日陰天折々小雨降ル朝青山小三郎來ル茂呂三郎兵衛ハ鴨壹羽到來已之刻過キ久留米藩手塚方へ參り酒給ル午後歸候得ハ喜田村修藏山田平右衛門尋來居候付爲相通酒肴三種ニ而差出ス暮合歸ル右之内茂呂も來り御用有之候趣ニ而先ニ歸ル夜ニ入山田ハ手紙來ル京師へ便り有之候間用も有之候ハ、申遣す可き趣也

○同五日

天氣小陰にも成ル杉生募ハ鴨壹番酒三升一同へ到來其内山田ハ鴨壹羽到來ス已之刻頃出宅越前家へ御使者一同相勤毛受鹿之助ニ面會御口上取繕申述ル上方武田賊之模様承知御直答可被仰出旨鹿之助申ス相待居候而御逢有之御直々御禮之儀被仰合於御前御茶菓子被下退候得ハ御湯漬被下趣ニ而一同一汁二菜一膳付御酒被下終て拙者へ銀子三枚壹兩三分外三人五百疋ッ、被下供之者共へも御飯被下飯にぎり午之半刻頃歸宅從夫鈴木氏一



同城東の南西大廻りニ見物東西之臺場へも望茂呂三郎兵衛杉生募山田平  
右衛門喜田村修藏へも相勤終りニ唐津藩尾崎嘉右衛門方へも参り暮合歸  
ル留守中御用達中原嘉兵衛方酒五升鴨壹羽一同へ相送ル山田平右衛門  
も來り明日馬上ニ内裡田之浦見物之旨申置候今朝暮を送ル所之鴨調理  
給ル所へ三坂五三郎参らる一同ニ口味す毛受過刻頼置候書付共來り居  
る

○同六日

雨天五ツ半時頃簀笠著用馬上ニ出起八條八兵衛山田平右衛門も馬上ニ  
而一同也海邊乗切菊之上濱と申邊根上り松林有之内裡ニ至る小休二所  
引嶋を望同所ニ酒差出ス風景美也彼是申内午食出ス同所船と申儀ニ  
而都合三艘へ乗込<sup>四</sup>也右之節小笠原内匠出張場へ一同罷越面會茶と西條  
梯差出候を八兵衛無心いたし船中之料ニいたす無程門司之關ニ至ル同所  
へ小笠原甲斐出張いたし居候ニ付罷越面會茶と菓子差出ス内裡大森平

次右衛門山名次郎兵衛樋尾林助乗込門司船中へ酒並ニさしミ生玉子根  
ぎすのそあい煮大豆數ノ子を入ル船中大ニにぎほふ隼人之社有城山と申  
而細川侯領分之節沼田某之城也と云ふ門司出崎と白地六丁と云々申之半  
刻過ル頃田之浦ニ著船す行々下之關方之破臺場見物す前田之邊も見ゆ同  
所酒造家清田久四郎二階へ著薄暮之比蒸氣壹艘上着船滯泊す薩之船と  
云ふ同所にて吸物肴彼是數種取肴さしミ大平<sup>か</sup>も<sup>里</sup>等<sup>い</sup>取<sup>も</sup>合<sup>せ</sup> 同所にて漁  
する小鮮魚<sup>あさり</sup>も<sup>あり</sup> 吸物 煮付候而さし出チャカタラミかん砂糖を懸而出川  
口重五郎青木啓五郎と申而當所之役人之由ニ出ル菓子並西條柿も出す  
戌之半刻過ル頃乗船内裡へ亥之半刻頃著し又過刻之處へ至り湯豆ふそば  
等ニ酒給ル子之半刻寢す

○同七日

内裡ニ拂曉前ニ起き明け離れ候而吸物硯蓋玉子<sup>蒲鉾</sup>しい<sup>かん</sup>非<sup>さ</sup>さし<sup>み</sup>した<sup>ら</sup>く<sup>青</sup>  
ミ大平<sup>か</sup>も<sup>欠マ</sup>ニ酒出ル朝膳も汁も平こふの物ニ出す終而辰之刻過ル



頃乘馬にて所々乗切る巳之刻比歸ル歸宅間もなく雨降今日左京大夫様ニ御逢之筈ニ候處明日と申ニ山田より手紙來ル鈴木七郎兵衛酒五升縮貳尾までがいを送り遣ス暮合山田來候ニ付酒差出ス同人歸り候得ハ三坂柴參り居らる先刻鈴木を送る處の酒肴一同給ル歸り後七草ニ付附人共へも酒給さす

○同八日

小陰にて天氣之方巳之刻七郎兵衛來ル赤馬關硯壹面持參酒差出ス吸物肴二種也午後案内有之八ツ時頃出宅嘉兵衛案内ニ而登城大坂門と申所へ入候得は小笠原内匠大場内藏助原主殿小笠原出雲等屋敷有之右之前通り東へ行き又門有之右門を入候而左へ行き本城之追手門ニ至ル右門ニ至ル所走り長屋焼而有り是ハ先日長州打入と申時火藥ニ火移り焼失すと云々右之門を入上ル事四五間之石壇也上り詰而左へ少々廻ると又門有り右之門を入候得は門内を石敷詰也右へ曲り石壇九尺程登り御玄關也右に飯盛辰

藏出向案内す屈曲して座席へ通る金張付ニ而見事也茶煙草盆菓子出候處ニ而山田平右衛門出面會從夫上條八兵衛茂呂三郎兵衛欠マ、終而御用人

大池一字不明馬岡出衛原庄右衛門柏木五郎面會從夫御家老小宮民部原主殿小笠原出雲等面會相濟拜謁ニ付山田案内ニ而御座次々之間へ出ル其處へ先刻之御用人共出迎大池同道ニ而被召出御前近く被召出御返答被仰聞其外一昨年以來之御禮並ニ以後之處も御頼に被仰合御手自六挺仕懸ケ袖筒頂戴退下引違ニ外之三人被召出御直答之上革鏝壹組ツ、被下退下御次ニ而御酒御膳可被下處御城中不都合之儀も可有之之旨ニ而宿へ御廻しニて上條原與五衛門原治兵衛山田平右衛門爲取持來り貳汁五菜御膳付御酒御肴硯蓋 兩御菓子 砂鉢調作身 大平 其外九年母燒キニ而被下其席へ御臺所頭 兩人並中原欠マ、出候而手持いたす歸り懸青山小三郎方へ爲暇乞罷越ス

○同九日

天氣小陰辰半刻頃岩田屋清兵衛方一同出起御城下半過き參り候頃山田方



か誰そ可戻旨ニ而柴相戻り候ニ付右用濟を御城下邊れ茶屋ニ而待合せ已  
 之半刻頃立戻り候ニ付一同ニ成り山田之申候次第道すから承り向ニ大倉  
 山余程高く見ゆ洗田村といふ所ニ高所有り二里程行而筑前豊前領之境杭  
 有り従夫壹里程行て黒崎と云所ニ至ル右驛少し手前ニ右ニ入江を望ミ城  
 山と云山有頂き平也今ハ畑と成りて見ゆれとも井ノ跡など所々ニ有と云  
 ヲ左之方ニも城跡有といふ未之刻前頃右驛へ著食事いたし未之半刻前三  
 里行而出起ニ而木屋瀬村ニ至る頃申之半刻頃也前驛へハ四里有りといふ  
 ニ依而同宿長崎屋へ俄ニ泊ス屋向手廣ニハ候得共都而不きれいに漸ニ  
 飢を凌のミ也

○同日

陰ル拂曉右宿出起驛出邊れ速ニ右へ曲り候得は木屋瀬川といふて餘程  
 之川大小二ツ有り大之方は步行三分計ハ細き橋有而渡り得れとも其之餘  
 之分ハ船渡也渡畢而植木村有なからして花を見る珍大小坂數多有て四里行

て赤間驛ニ至ル驛右後ニ城山有り餘程高し従夫貳里行而崎村驛ニ至り午  
 飯食すそはを用ゆる所味可也なり時刻を問ハ午ニ少々早めと答ふ従夫又  
 貳里行而青柳ニ至ル其頃小雨小々降り陰晴色々ニ變す驛を出候而行事八  
 九丁ニして日見ゆ八時頃也四里行而暮合箱崎ニ至ル右ニ 不至壹里計ニ  
 て右ニ名嶋といふて金吾中納言秀秋公城跡有るといふ路傍ニ米一丸之墓  
 とて道之右ニ數重之五輪有り同所より宿籠ニ乗り酉之半刻頃博多中嶋森  
 與平方ニ著す従夫宿にて酒肴貳種さし欠、大平欠、ニて差出ス  
 一此國ニ不入前はせ之木數多也此境ニ入而ハ高山も有れとも地山多く  
 土地之分ハ頂キ或ハ半腹は上迄田畑ニ刻リ所々ニつゝミを拵田多くして  
 肥饒ニ見ゆ少し山之方ニハ能くはせ之木を植而見ゆ誠ニ手届き候様ニ見  
 ゆ箱崎之八幡前を通り候處夜中ニて模様不分數千株松林見ゆ博多之町之  
 入口ニ川有之橋を架す其向ニ見付を設れ門内ニ番所有り市中誠ニ美ニ見  
 へ誠ニ大ニ繁花ニ驚く著之上問へハ今日ハ惠比須之日ニ付別段ニ人出渡



るといふ

○同十一日

天氣被進之菓子貳ツ通あつらい久野一角方へ明日御口上申述度候間逢之儀手紙にて申入午食後博多之町を遊歩す或店にて守位之古書を求む從夫海邊へ出臺場等見物す小臺場貳ツ有り大砲貳挺打出し之儘にて海邊ニ有り西南へ行事三四丁ニして燈明臺有り其内ニ臺場有り外郭之邊れなり其右ニ船溜り有りて數艘有り又遊歩して申之過ル頃歸ル無程待井次郎兵衛來り菓子差出ス吸物御酒肴三種御取肴欠、さしみ鯛青みう欠、大平相濟壹汁三菜平、切之者にて食事差出菓子迄差出夜五ツ半時頃歸ル明日午後案内次第一角面會之儀相約ス

○同十二日

拂曉雷鳴終日雨降暮頃ニ至り案内有之博多町高瀬屋某方にて御口上之趣承知可致旨ニ同所へ罷越大河縫殿久野一角罷出候ニ付御口上之趣同人を

以申述下野守様へ同斷也被取持江藤徳久衛篠原幾平爲取持出ル右兩人其以前ニ尋來ル菓子差出御口上申述終而吸物御酒肴三種外ニジカタラみか欠ん引續壹汁、種引物共被下菓子蒸欠、子共ニ盛交にて被下四ツ半時頃歸宅明日御返答被仰出候ニ付四ツ時頃案内次第登、城之約束す

○同十三日

天氣能篠原幾平爲案内四ツ半過ル頃參り候ニ付一同早速出宅、口を入大名小路といふ通を経て登、城御玄關へ案内之者出居通る其處幾平出用達役川越又右衛門面會無程幾平案内にて小書院といふ座へ直り候處御家老林丹後石四千黒田大和石壹萬八罷出面會終る、御用人郡左近石四千吉田大炊石六千五野村東馬石五千小河縫殿石貳千久野一角石貳千面會相濟無程縫殿一角御取合ニ而御直答被、仰出其外御懇之御意共有之寛々滯留可致旨被仰申相濟退下於小書院一角面會下野守様之御返答被仰出相濟元之席へ戻り候處ニ而博多織帶地二筋被下一統へハ壹筋と烟草入貳ツツ、從夫御吸物御



酒御肴三種ニ御酒被下午食一汁三菜兩御菓子盛交ニ被下御酒中場東馬一角罷出江藤徳久兵衛幾平同役 仁平眞鍋平右衛門等も爲取持出ル終而退下從夫直ニ一角へ御禮ニ罷越 東照宮御宮參拜從夫市中遊歩懸小河方へも爲御禮罷越暮ニ歸ル明日 太宰府參詣之旨約ス 御城中町奉行支配片山利平と申者案内として罷出ルくいたちのとふを給ル誠ニ珍敷

○同十四日

雨天四半頃出起間部兵右衛門篠原幾平等一同宰府爲參詣出起雨頻り也壹里餘行而板付村ニ至る休ス二里行雜餉熊村ニ至り午飯ス重並酒提行而給ハる巖屋寶滿嶽等左ニ見而薄暮宰府和泉屋宗兵衛ニ著す同所ニ吸物御酒肴數種上給ル深更ニ及相止む町奉行支配田村壽作も隨ひ行爲取持出ル

○同十五日

朝雨降辰之刻供御有之趣ニ爲參詣一同罷出ル一同百疋相備參拜す引續寶物を見火災ニかゝりし由也御太刀有之天國之作と云其外奉納之刀數本有り三條宗近京信國河内國住秦包平肥後延壽國房備中住青江眞次紺地金でい之大般若經御自筆之由ニ有之外ニ大身之長刀有之相濟而御宮を廻り梅花を望ミ滿開ニて能節ニ逢ふ五りん花を申受從夫御社地内を拜し又細字經文をも拜す神酒を戴き終而茶差出菓子ニ當所名物之由燒餅を出ス御守札を呉れる終而四ツ過ル頃歸宅其頃より雨止食事終り又吸物御酒肴數種ニ而給ル相濟午過ル頃出宅歸リニ雜餉熊村午飯給ハル暮合過キ歸著歸り懸ケ左府之跡と申所ニ觀音寺有り夫へ立寄り樂器古面三ツと小野道風之筆を見ル從夫歸り道道上古瓦之懸ケ兩三品を得たり間部篠原天滿宮御守と同所之繪圖を送ル浦上久野野村小河酒肴を送ル久野絞り壹端を送ル

○同十六日

朝天氣江藤徳兵衛唯今京師へ出起之由ニて立寄其以前待井次郎兵衛來り



談話する次第有り同人菓子もたらす今日出起之處路次未半ニ相成候ニ付  
申合明日早朝之出起と相定午食後與吉案内ニて箱崎八幡宮へ參詣其以前  
折々吹懸ニて雨來ル路すから博多之松原を通行其内ニ千利休茶點する處  
之古跡あり立寄り從夫海濱ニ至り八幡宮參拜同所御門之クニり鐵後藤之作  
といふて千疋猿之古物有在茲力長使若生仰帝職誰 門額敵國降伏之四字也いつ  
れ古社と相見中濱を四五丁社之方へ寄鹽見といふ有り古ハ其處迄鹽來り  
しと云々今ハ追々うつまりて右之通也參拜古額共拜見右之内ニ御國坂下  
米引様之圖有之其いわれを問へハ正月三日玉を争て其玉を得候方勝ニて  
大ニきは候由頗る米引同様之様子ニ相見ゆ三段位重り合候由申ス尤皆  
皆裸ニて亂髮也又々雨ニ相成候ニ付早キ歸路ニ趣き暮以前歸ル明日彌々  
出起ニ付浦上野村小河久野等へ禮旁々書狀遣ス久野拙者ハ別段之廉ニ付  
ても遣す亭主へも五百疋遣ス

○同十七日

朝陰ル六ツ半時過ル頃出起博多邊トれ迄與吉見送ル同所ハ雨降ル箱崎宿出  
拔ケ河原ニ至り風雨甚敷傘を折る殊ニ寒さも甚しく手足こゝへて痛を不  
知左右共ニ足わらちニて破る午以前木屋瀬村ニ至ル處五卿通行之由ニて  
午食ニ休する處ニ行逢たり是を幸と其行粧始何者等附添居哉と見る爲ニ  
其出起を伺ふ爲相待半時計ニて四條壬生は馬上三條三條西東久世三人ハ  
駕ニて出起也脱藩之士州人十人程久留米水野丹後土州土方楠右衛門之甲  
冑櫃札をも見たり右之外筑前藩士と相見鐵炮ニ而先とも行跡も十五人  
行たり相濟即刻出起壹里行而石坂と申處ニて午食すほとんど會津之強清  
水茶屋位之體也給る物わつか也貳里行而黑崎といふ所ニてそは貳膳と酒  
を給ルつゆハ菜へ根深を入れて煮交たる物也



明治元戊辰年日記

自六月十八日  
至十一月十八日

○六月十八日

五半時前 宮御機嫌能 御城中 御發輿御供ニ不發足同日大鹽村十九日

檜原御境界へ郡奉行守衛兵士出張奉迎 輿御跡奉從綱木村へ御一泊會

津方御供之面々(欠字)ニ付御輿之者迄宿(三字不明) 夫々明朝宿邊御供番始御

徒御臺所御輿之者迄御通筋ニ出御暇戴く

○同廿日

米澤城御著輿此節若候并御末家城下入口迄奉迎重役中老等相從 本城ニ

御滞在

○同廿三日

奥羽諸藩御指揮被遊被下候様且白石城假 御座所之儀仙米藩一同覺王院



鈴木安藝守を以て奉願候處御法中之 御身分如何にも御素意ニ不被爲叶  
御聞濟之處ハ御扣被遊猶御勘考可被遊白石城御座所之儀ハ御聞届相成候  
御滯在中 (一字不明) 族下之者仙藩中村藩靜慮庵等來被謁同等之儀有之

○同廿七日

五ツ半時前米澤城 御發與同日新宿御宿

○同二十八日 關御泊

○同廿九日

白石城御著片倉小十郎本城門外ニ奉迎

○七月朔日

岩沼館へ御著此節古内左近助門内に奉迎す

○同二日

仙臺城下仙岳院へ御著與此日仙臺侯御父子中田驛迄奉迎若松表ニ(欠字)  
通仙藩ニハ仙岳院を 御座所ニ致度旨談論始ル

○同五日

平瀧ハ敵上陸勿來關戰不利之報告有り可愛大事件ニハ候得共仙臺藩要路  
者共恐怖殊ニ甚キニ付過言仲リ義モ有之扱御座所之儀是非々々當所へ相  
定度旨度々談候處彼是周旋先以米澤城ニ被仰出候通ニ御治定被仰出右  
ニ付覺王護法之兩院ニ於ハ隱然たる盡力有り

○同十二日

四ツ頃仙岳院 御發與城下入口御小休所へ竹中侯友成將監等來拜謁御用  
有り同日岩沼御一泊

○同十三日

白石城御着與如先申儀板倉侯山徳山中侯其以前同所御來着拜謁有り此後奥羽  
同盟諸藩日々城下へ出ル

○同十四日

去ル十一日最上方ニハ仙米山形上ノ山之兵薩長肥前小倉等之兵と戰新庄



之裏切ニ依テ味方敗走之報告有リ 宮御膝元之儀奥羽同盟諸藩へ御觸出  
取計ニ仍テ公議府ト唱可申且軍事局會計局等之儀治定ス

○同十六日

諏訪片山仙城下ノ著ス 伊達信夫兩郡へ出金申(欠字)之儀治定之處其外之兵  
を打破新庄城燒打之報告有尤仙藩出兵使節兼來ル

○同十七日

徳山侯新瀉行御治定ニテ御出起信達出金諭之儀ニ桑折へ御立寄同所ハ舊  
御代官黒田節兵衛へ御談事モ有之筈安部井政治被召連松川精一も隨行ス

○同十九日

但木信達出金不宜旨又々諭ス夕刻黒田節兵衛出來リ候ニ付但木一同ニ出  
金申諭之儀及談判候處首尾相整

○同廿日

奥羽同盟諸藩へ 宮様御直御沙汰之趣并警衛人之義棚倉老公福島方面御

指揮可被成筈ニ付同所へ角田繁治出張之面々可心得様被達之義新庄落城  
候次第爲注進若松へ飛脚として附人角田繁治着罷候事 諏訪殿會津ノ被  
着

○同廿一日

但木仙臺表へ發足池田大隅守到着

○同廿二日

敵川下、一保築川邊を窺ふと注進有上 山中侯仙城下へ御發途諏訪殿米ノ新保も  
從行諏訪常吉福島方へ發途

○同廿三日

南部津輕兩藩へ時情貫徹且出勢之儀及談判候處出張人之内各國元へ發足  
ス去ル十六日庄内兵吹浦女鹿村ニテ大勝利地獄穴と云所へ追入多勢打捕  
候旨早打來且仙南津等之兵各國境ノ早々打入候儀を促す上ノ山藩増戸武  
兵衛越後方面へ出張いたし居此間歸國引續當地出張ニ付彼地之事情形勢



詳なるニつき幸爲御參考委曲申上吳候様永田又助明日歸國ニ付一同承り  
申含候○三春敵と通すか之聞有之候ニ付若松ニ御心得不明ニ相成候様同人  
是又申上候様頼遣ス仍而三春差置し琴田(欠字)主従を城内へ抗留す

○同廿五日

長岡城恢復之旨米藩報告來ル

○同廿六日

南摩福島へ行

○同廿七日

津輕藩變心斷然敵軍に及一味之旨斷有之段仙藩報告 三春變心敵軍へ  
内應し仙會之兵を欺打候段報告有此節ニ當而中村表出起之仙米其外疑懼  
を懷き使節往復數し 諏訪殿歸りを促し遣ス

○同廿八日

中村表を春日右衛門引揚來候處元來庄内藩と及約束置候ニ付當人も其方

へ可參旨尤庄内ニ而右等始を迎として出來り相方引合ニ相成候處即今切  
迫ニ付先ツ仙藩ニ可盡力之様御沙汰ニ相成ル○夜ニ入黒河内友次郎同所  
ル

○同廿九日

二本松城切迫之様子報告續落城也且敵方内應之疑も有之趣ニ付仙之計ニ而右藩の  
差出置候安部井清助を城内へ押留む夜中ニ至り二本松變心ニ無之旨相分  
ル

○八月朔日

越後之敵蒸氣船六艘ニ而襲松崎上陸新發田變心之旨米澤より報告右  
藩平田國元へ出起○敵川船ニて乘下瀬上へ襲來ニ付福島表引揚候由報告  
有り仍而仙藩へ要所へ人數配り川船等配り方申談萬一之節 宮様御走退  
方面覺王院へ機密及示合仙城下越河方へも仙役人夫々出張ス中村方出張  
之兵いつれも不振不容易様子ニ相聞

(備外)原ノ  
マ、  
ニて瀬上邊  
迄候ニ人數



○同二日

瀬上ニ敵不來全仙藩之虛動ニ有之義相分り公議府ニて仙兵ハ不退福島へ  
繰戻し二本松三春等之横を可打ニ議定黒河内戻リニ付右相傳候様申含ニ  
成ル○昨夜中村方へ出張之能義隊之者著候處仙兵米二小隊純義隊にて朔  
日夜三春を可打手筈也大雨ニ付ハ如何相成候哉之旨申す中村方へ出張  
之米兵純義隊共ニ引揚案外之次第也○新發田變心敵ニ内應す去月廿五日  
城下へ同廿九日敵を引入長岡城又々敵ニ陥リ候旨報告す○羽州方及位中  
田大瀧口勝利之旨上ノ山藩増戸ハ申出(欠字)中村方出張之仙兵甚た不振中村  
危急之旨相聞右ニ付春日右衛門大ニ心配あり

○同三日

片倉倅豊前は湯ノ原方へ出張仙藩ニ而黒田節兵衛を捕白石城下を護送通  
行す○仙臺城下ハ諏訪殿戻著

○同四日

神尾鐵之丞著爾後人見勝太郎著池田春日諸藩出仕中村方兵備之儀談判有  
之仙之眞田喜平治著二本松邊模様其外之形勢相分進擊之手筈ニ談極○福  
島表へ昨日仙兵又々繰込候處是迄無事之節大驕(欠字)臨變大ニ拙なり舉動を  
怒り民心動搖發炮ニ及候ニ付爲鎮撫右眞田一同米之片山彼地へ發足す○  
米より急飛著越國出張之兵可引揚旨也右急飛差戻し勉強不引揚様申遣ス  
○夜中山中候仙城下ハ御戻り○米兵純義隊三春を不打して引揚來

○同五日

桑折宿ニて米兵出起○諏訪出張先ハ過日會津へ參り今度三瓶梶助石山一  
同戻り著○神尾羽州坂田へ○諏訪三瓶福島桑折方へ出起今朝春日中村方  
へ出起之筈也

○同六日

相馬變心之旨報告有

○同七日



護法院會津を経て日光御領地へ志し發足

○同八日

仙臺侯當城に御入來山中侯御參會諸藩人數配り其外議定す○仙侯諸藩へ御逢有之福島方出張候 米兵自儘ニ引揚候ニ付早速人數繰出之儀ニ付今朝片山國元へ早追ニ出起ス

○同九日

早朝仙侯當城御出起○上ノ山藩泉水増戸來仙臺如斯不振加之宇和島老侯を和議之密使再居由越地其外藩々變心ニ付亦ハ恐怖を懷き變心も難計仍亦ハ何卒仙城下へ罷越異心等氣遣無之様致度旨密話致す○南摩福島方出起川俣方へ棚倉兵出起之筈

○同十日

護法院出起可認○仙臺城下可罷越旨諏訪殿を被申聞昨日上ノ山藩之議ニ依而也○宮に暫時之間御暇奉願候處拜謁 被仰付銀子被下置

○同十一日

白石發途同夜初更仙城下へ著(欠字) 今半途過右(不明)ニ當り立火之様子ニ相見候ニ付心配之處駒ヶ峰破敵より燒かる果して駒かへ移ル

○同十二日

玉虫左太夫方へ相尋松枝屋敷應接所へも出此後日々罷出其外重役并要路者諸藩へも及談判候○大内主水始中里半九郎太江又兵衛其外之者共ニ面會所ニ申談人見勝太郎も同所へ來庄内藩白井方へ參り談判

○同十三日

上ノ山藩旅宿へ參る 爾後庄内藩上ノ山藩一同松枝屋敷へ出庄内應援之言ニ而白石方中村屯しよ敵横を可打ニ議定す仙藩大ニ力を得たり

○同十四日

鈴木多門著當藩無變心様爲周旋其余談判ニ付庄内上ノ山藩一同松本要人方罷越徳山侯新瀉行無御叶中途に御戻り御著



○同十五日

諏訪常吉白石表より著

○同十六日

徳山侯白石へ御發途○山内大學著

○同十七日

米澤ニ出羽村山郡押領之取扱有之候ニ付庄内藩白井一同米藩人へ及談論候得は仙藩信達之取計ニ倣ふる事也と云始ハ仙之所行如何也と論て同所行之段同盟へ對し不宜旨論判相(不明)候へハ國元申遣筈也私へ附屬被仰付候結城繁治附人角田繁治右兩人義談事之上諏訪常吉へ被仰付候御用をも融通爲相勤置候ニ付結城共仙臺表へ相殘附人ハ越國方道塞御國元魚類少々可有之候ニ付常吉一同雜物相求爲相勤數駄差起候才領ニ申付候處米ニ被差留候

宮様御座所之儀仙藩ニ於て彼是物議差起唯今之處何分於仙藩說得之道不

相叶居り合附兼候何卒仙城下へ御遷座被下候様願度旨懇談有り同所詰合諸藩ニ於るも即今之形勢尤と存候次第ニ付御遷座願候儀仙藩并各藩より拙子ニ周旋方頼談有之

○同廿一日

暮以前出起

○同廿二日

朝白石へ著ニて同所詰合各藩へも次第申談御遷座奉願候處御聞届ニ相成近日御移りと存罷在候處豈計廿四日夜半過石菴之破承知驚愕扱宮へ御心附ケ之御深意奉(不明)し機臨るハ粉骨碎身志奮ふ不幸之至御國本如斯遺憾無此上候得共直ニ御暇奉願廿五日出起之覺悟ニ候處僅三人ニ今日ニ至り入込候得ハ逆何程之御奉公も盡得申間敷遙々御國情を察るに御隣國へ援兵乞之御使節可被差起場合也手懸有之者ハ其方へ起越援兵寸刻も早御城下へ差向候様周旋致候方忠節ならんと云論ニて諏訪殿へ猶又相伺同夕發途



翌廿六日朝仙臺へ著直ニ松本要人方へ罷越援兵等も頼申入只先達て中  
談判懸り之中村方出兵之儀も及談事候右兩條ニ付遠藤主税退出毎夜出ル  
退出夜半過ニ及候義も有之

○同廿九日

板倉侯の鹽釜へ参り候儀同所ハ榎本泉州佛ブリーウチ等上陸ニ付松本義  
爲出迎出張致候ニ付援兵談事果敢行ニも可相成旁々ニ付同所へ罷越

○九月朔日

鹽釜へ戻ル此日榎本氏始ブリーウチ等仙城下へ入○明二日松枝ニ而六ッ  
半時米藩一同會議之議夜中申來

○同二日

朝松枝會議所へ出時ニ米藩甘糟備後早追ニ而此夕著片山も一同罷出仙  
石母目<sup>田カ</sup>但馬遠藤主税罷出候處米田土州人某ニ密ニ引合候處此節和談ニ及  
候得ハ各藩本領安堵ニ相成可申旨ニ候間右土藩ニ面會之積リニ候乍去同

盟之間嫌疑相生し候而ハ目前災可生も難計ニ付一應及案内旨申ニ付右ハ  
全敵之手段と存候必至不宜旨大ニ及論談候得共石母目<sup>田カ</sup>遠藤ニ於而ハ專カ  
レニ同意ニ而土州人ニ引合見候丈けハ可宜旨申ニ付引合候得ハ則其引合  
糸口と成彼之手段ニ落ハ眼前之旨強而争候得とも甘糟片山飽迄主張屈伏  
無之ニ付一旦引取諏訪殿へ申達庄内藩へも及談事候處仙米へ尤不同意ニ  
而諏訪殿一同罷越及極論候得は詰り最一應仙侯へ伺候上と申處ニ而相分  
れ其夜何等之挨拶も無之米甘糟一同仙も應接人出起爲致候由駟も不及  
舌

○同三日

松枝屋敷ニ而軍議ニ付徳山侯永井侯榎本氏松平氏仙重役始同盟諸藩佛人  
ブリーウチカツノフ各五時出ブリーウチ<sup>(一字不詳)</sup>圖兵數を計ニ同盟之國々日  
本全國十にして何分ニ當ル同盟藩々協力一心なる時ハ猶可敵天下反之ハ  
千之兵ニも<sup>不脱カ</sup>可能勝各如何と云各藩一心ニ可協力義同音ニ答ヒ議決す仙領<sup>フリウチス</sup>



近領之圖を按し中村の福島方面へ懸ケ方略を述ぶ歸路佛人榎本氏等梅林と云所ニ而額兵隊訓練を見せ饗應すと云後今夜榎本氏の海軍か陸を援兵ハ困却之次第ニ候得共若松城御切迫 付而ハ強而繰合元込銃之兵五十人援兵可差向旨也○同盟中ニ而ハ自國他國不論敵之模様ニ依て兵を出す可き旨前松本ニ談判彈藥三萬發鉛と交易猶又伊東相模へ熟談右荷作ニ而受取即夜より追々差配候○扱頃日以來諸方報告ハ不宜於仙藩如織之混雜甚し漸々にして援兵ニ々楯繰出しにも相成此上長居すればとて不相見○第一懸念仕候仙藩變心無之儀ハ松本始め夫々試候處大丈夫ニ相見候○柏崎諏訪ハ相残り候義若もの時ハ兩人ハ盡力之筈ニ付彌歸國ニ決

○同四日

松枝會議所ニ而後ニ可入即今福島方面ハ至極要所故至極大切ニ付手配リ之論有之前ニ庄内本田小三郎福島表より來るニ付面談若松ニ居候スチル妻子護送し來

○同五日

朝諏訪殿出起此間中より建言之儀一ヶ條外採用無之<sup>(欠字マ)</sup> 諏訪殿申置ニ付スチール妻子ニ贈物遣ス<sup>(欠字マ)</sup> 残り兩人ハ跡之儀談事相濟七ツ頃發途福島表ハ當節若松無關係繼要之場所且昨日本田と懸合候次第も有之殊ニ山中候管轄被成御座候義ニ候得は旁若松表應援奉願夫より歸國之心得ニ而同所へ相廻り六日夜著○諏訪殿先刻著之由

○同七日

仙若老大内主水來り山中候へも言上なく休戰之儀同所出張諸藩へ傳ふ○井上金庫出兵召連歸國之積リニ而發足米境上ニ而不入ニ依り戻り來

○同八日

大内休戰之儀ニ付相觸候處仙松本ニ於てハ拙子斯而罷在候内ハ安堵候様申其外要路之者心中トハ雲泥之違なるニ依て三瓶梶助一同庄内旅宿へ出候處本田小三郎も立戻り居於城下無動段仙侯ハ直ニ被仰聞候趣申られ大



内々休戦相觸候ハ全中間姦者之所爲ニ可有之とさつせられ庄内々及懸合候處大内も君命也と云依不相決於城下可伺決ニて庄内隊長中村本田大内一同此夜急發途○南摩も城下々來夜中同所へ發○諏訪殿一同若松へ發途之積リニ候處仙藩無變意次第辯候者外ニ無之間私ニ可殘旨山中侯被仰聞候間殘候様諏訪殿被申聞不得止畏候

○同九日

諏訪殿若松に發途 米藩ニ而仙臺之援兵共道を變一モ不通且松本ニ談判差起候彈藥も差留敵兵を城下へ引入甘糟變名にて兵卒を引而當境へ出張異心益顯然衆皆怒り獨仙藩人共而已不怒益々恐怖之色有り

○同十日

榎本氏遣す所之援兵五十人澀澤精一郎總括ニ而著

○同十一日

米藩々諸藩可引取旨柘觸諸藩不得心物議粉々或ハ可討取と云も有れとも

不整○會津より千程之兵士湯口より來る旨報告あり何成哉更ニ不通義且ハ案事且ハ待心有り

○同十二日

會兵來を見れハ大鳥古屋純義隊等也直ニ可差戻周旋之處彈藥及兵糧無之故右調之爲來ると云ニよりて仙藩外ニ可借受處も無之ニ付出張之頭立候者始へ頻リニ及談判候得共いつれも無之白石迄も參候ハ、追々可相辨と也此間以來恐怖甚しき故歟内心引揚支度故也膽魂も身ニ不纏と如しと風情ニて更ニ相手ニ相成ス當惑極り申候大鳥等ニ於而ハ如斯多兵を此一所ニ留置候てハ敵之爲ミナコロシニ相成間々寸刻も分配を急き候ニ付山中侯御旅宿 軍議之處米藩より當所へ出口李平并桑折へ之出口右兩所へ兵を配り其外二本松方面より襲オニ逢ぬ様要所々々ハ兵を配り桑折を根本といたし夫より米澤へなり二本松方也臨機進撃し會津へ打入之敵を撃之外策なしと大鳥建策ニ依山中侯ヲ始之ニ決ス此青山中侯桑折へ御發



途ニナル躰頗怖色有り

○同十三日

昨日より諸兵不殘引揚當福島へ残りハ米兵と福島之寡兵而已なり朝仙藩要路之者僅四五人残り引揚之案内申越早々出起其外昨日午後發途暮以前桑折へ著之處仙藩も不可計知之様子粗相聞候ニ付桑名山脇十左衛門も來著ニ付爲可相謀夜中相越

○同十四日

山中候始御參會之旅宿より呼ニ來罷越候處仙藩國論相變彌恭順 過日城下へ參り候庄内本田も戻り候處彌實事ニ相違無之旨被仰聞落膽失途方申候扱大鳥古屋純義隊等ニ於テハ疾ニ承り候哉大瓦解之躰ニ而仙堺越河關へ逸足出して入込兼而衝鋒隊へ被附候者共大場恭平等始昨夜ハ一同相成候ニ付申談候得共右之都合ニ候得ハ建辰之策も無之切拔ケ御城下可通ニハ米兵道を擁し迎も可相達程之勢ハなし徒ニ道路屍を晒も笑を殘而已ニ

而無益事也殘念極泣々越河關を入候得とも前へ一步後へ一步胸中如焦初更過犀川へ著何卒此次第御城中へ相達候様致度彼是心配中吉村寅之助（次字）日（下）同御城（下）武田敬助（今度大場等と兩人山を潜候而も參り可申旨ニ付一同可然と之議ニ因從同所差戻候處終ひ入事不叶とし而後日仙城下へ入來り殘懷之事共也

○同十五日

於白石表過日兵糧彈藥等金田三右衛門へ談事置候處及斷大河原へ止宿之處仙藩ニ而之強兵額兵隊其外有志之者共今度之恭順を不得心ニ而所々へ立退姦惡を除く策を運居候由相聞候ニ付是を根兵と致候ハ、大鳥古屋之兵引戻も出來若松表へ應接之道可相調哉と氣力を得夜半なれとも直ニ人足申付大場一同十六日朝駈付候處存込相調可申候見詰も無之斷腸々々桑名候へ拜謁ス 此夜中鹽釜へ御發足

○同十七日



德山侯山中侯永井侯鹽竈へ御發足○夜中榎本氏へ行る計ル益ナシ

○同十八日

開陽始附屬之船々へ不殘乘組之儀申入候得共右船ニハ限り有り而不相叶候ニ付庄内行と半々ニ相成候様申談大場始今日追々發足す○總督之宮米藩へ庄内追討之先手御沙汰ニ相成候旨報告有り玉虫城中へ留らるゝ風説有り

○同十九日

榎本氏等城下出起

○同廿一日

庄内行之者乗船之者共夫々出起す○扱若松之方掛念一日々々と今日迄出起延引之處敵城中へ入込ミ仙藩不殘戎服を去り彌以恭順之道相盡朝野恐恐可被追出形勢ニ至り候ニ付夕刻出起庄内志し而罷越候處翌廿四日岩手山入口ニ而先日方出起之面々戻り來るに行逢たり米澤方出兵(欠字)往來を

廿三日

廿七日桑名  
侯德山侯山  
中侯御上陸  
榎本氏方病  
院之義管轄  
被願

差留通路不相叶趣也無據(欠字)同引返し廿六日鹽釜へ行候處開陽附屬之船ハ乘組相成候都合ニ而十月朔日鹽釜出帆ノビルと云所ニ滯留四日石巻へ移り九日同所出帆織之濱へ著十二日同所方蟠龍丸に乘組出帆同十三日南部領宮古港へ著同十八日同所出帆廿日エトモと云所ニ至り下錠諸艦來泊を待ツ然處諸船鷲ノ木へ著同所より上陸敵軍より發炮戰爭相始候旨廿三日暮頃開陽丸方報告ニ付同夜出帆翌日鷲ノ木へ著此夜同藩之面々出張相成候處私義病院懸可相勤旨榎本氏申聞ニ付相辭し出張之儀申立候得共差間候儀ニ而存意不相叶三宅大學一同相勤居候

十一月七日夕箱館病院人少ニ而差支候間右へ移り候様申來候ニ付翌八日朝出起箱館へ移り申候病院懸りハ相辭外ニ何役なり相勤可申と申立候得共松前ハ其以前手もなく落城引續江刺も落去敵ハ皆津輕地さし遁去ぬ當分之處戰爭ハ病院大切ニ而手負ハ勿論當病澤山ニ有之中ニは重き身分之者も有之右進退をはしめ烏合之大勢之病者取扱ハ勿論醫師ナラズ看病



人勝手向末々ニ至迄其外大細事悉皆取握一局之主宰ニ候間轉シ難き旨ニ付又々不得止任其意居申候

明治二己巳年日記

自二月二十三日至十二月晦日

○二月廿三日

高龍寺引拂病院へ移ル天氣好竹中殿被參夜ニ入三浦來ル

○同廿四日

朝之内少々ツ、兩三度雨降後天氣○朝竹中殿高龍寺へ參ル○高龍寺禮ニ來ル

○同廿五日

終日雨晝前本陣へ出川村高橋ニ金米普請之儀申談從夫運上所ニ行午時歸ル○昨夜五ツ頃佛之交代船入港晝後兼約ニ高龍寺へ行澁谷侯始御參會御歸り懸ヶ一色侯へ御出ニ付參ル

○同廿六日



天氣佛船交代御多忙之處俄ニ今夕ニ相成ル夕井上石田參ル○昨日佐久悌並河來ル

○同廿七日

晴諏訪手紙田村持參夕高松氏下宿移り之事

○同廿八日

晴晝後本陣へ出ル佐久悌へ病者之儀申談

○同廿九日

晴風ニ而寒晝後本陣へ出ル臺所普請之入札開く福島へ返事二度分さし出ス暮以前又々本陣へ出金三兩受取ル普請仕様帳繪圖下ル

○同晦日

晴夕高龍寺へ參ル右寺病院是迄通心得吳候様之儀談ス夜正廣(不明)見

○三月朔日

雪風寒シ一昨日英商船入港之由大坂船先日カ二艘入ル

○同二日

昨夜より雪積二寸程終日認物

○同三日

晴四ツ頃カ井深從夫會計へ出岡崎へ參り歸り懸け燒跡邊より雪ニ逢ふ夕ニ又々晴佐久間來ル三宅岡崎來ル佐久間一同土方方へ同人より手紙越候儀ニ付罷越候處最早出起ニ付佐久間方へ罷越暮而歸ル

○同四日

晴四ツ時頃青柳へ福嶋行之儀ニ付參ル歸候處土方カ手紙來候ニ付即刻罷越候得は留守也仍而佐久間へ罷越歸リニ又々土方旅宿へ立寄從夫稱名寺へ尋られニも不居候ニ付歸ル夜中同人へ之手紙認晝前岡崎井深來正廣刀

○同五日

陰晴不定小雨來事有り早天佐久間悌二へ出土方へ之手紙相頼夕三宅三浦朝倉田嶋等來ル岡崎も



○同六日

雨夕晴朝英船入港一昨日頃市中片付始り今日方頻り也岡崎永井殿子松本來ル

○同七日

朝晴夕曇柏崎の高松氏へ手紙來福嶋行醫者之儀也夜中右返事認添書も認朝東條來存意咄ス能州船入港候由夕英之帆前船入港

○同八日

雨晝後追々天氣晝後竹中殿より手紙來ル湯治行之由ニ付即刻參ル桑藩人著候由ニ付直ニ罷越候處松岡孫右衛門後藤（欠字）兩人也様子承り七ツ頃歸ル青柳福島行ニ話定本陣の手前出ス朝柏崎へ手紙出ス

○同九日

天氣晝前會計へ出金催促ス青柳尊之儀も申ス柏崎の返事達ス○竹中殿今朝出起

○同十日

晴青柳出起ニ付昨日認諏訪へ書狀さし出ス晴ニ付晝後より山へ登四方眺望を志し出起連を尋候處幸山本ニ逢案内いたし吳一樽を提吳一番觀音之處ニて開俄ニ東風起り寒ニ付山下へ下り開庭中桑藩人ならしき者兩人來歸リニ竹柴ニ寄り山本ニ報禮す其中雨ニ成り同所より傘かり七ツ半前歸ル

○同十一日

追々天氣晝食後本陣會計へ出金百五拾兩受取歸リニ道具屋へ寄り品々一見七ツ前頃歸ル帶直シ頼

○同十二日

快晴高橋辰次郎湯治ニ出起ニ付柏崎へ手紙差出ス○庄内へ加藤章太郎歸候人尋來ル兩人（一字不詳）

○同十三日



晴異人とも都合四人來夕英蒸氣船入港

○同十四日

兩夕より晴伊庭八郎來ル夕板本被參談判有り

○同十五日

曉雨朝より晴夕七鼓頃カ三宅參り吳候様申ニ付參り候處養子いたし候ニ付神酒相備候由也○昨日之咄ニ付病者共歸シ可然心附高松氏ニ様子承ル

○同十六日

晴風朝井深方へ參り歸り之儀申談岡崎坂井來ル酒差出晝後三宅ニ被誘又又一供ニいたし七面社カ十カ之庭一見同所ニ在り一飄開シ一昨夜板本總裁之認と相成候書一覽從夫谷地頭へ參り歸リニ井上方へ立寄歸り之儀申談一同へも同人より可申談吳旨共々及談判又々可立寄勘定いたし七ツ半頃歸ル

○同十七日

晴暖和風曉三帆之小船入港長鯨出帆三宅カ手紙遣候ニ付一郎罷越金子三拾兩借受晝食いたし歸り直ニ本陣へ出從夫間澗口へ參り正廣刀求歸り懸又々可參り七ツ時過頃歸ル

○同十八日

山瀬風雨夕荒れ模様刀又々一口遣スカソウチ來

○同十九日

晴風本陣荒井郁之助カ先生へ手紙遣候ニ付被出候處宮古ニ掛り居ル惣鐵船襲打乗取之策ニ候處蟠龍丸醫遠山春平儀不快ニ在り罷越兼候間病院カ何と歟綜合を以壹人醫師遣し吳候様との談事ニ付右之段内談有之候故赤城ニ及内談候處罷越候儀承知ニ付彌取極ニ相成初夜乗船ニ付蟠龍迄運沼一同送り參り船將松岡ニ逢引渡歸ル松本來ル戻り候得ハ無程歸ル船今夜出帆之筈ニ候處如何候哉延ル○明朝出起之由ニ在り田村來

○同二十日



晴風有回天丸蟠龍丸アシユロツト之三艘昨夜出帆無之六日英船ハ應接濟之由ニ右船八ツ時出帆也右出帆ニ相成候ニ付今夜三艘出帆之由田村來る金をねたル壹兩用立遣ス諏訪ヘ之手紙認

○同廿一日

快晴三艘之船今曉出帆之由昨日認候狀一寸書添同時來を待候處不來候ニ付午前町會所ニさし出ス晝後歩行ニ出ル三宅を誘候處留守ニ付柴之前を通行之砌尋候得ハ居合候ニ付立寄候處寫真いたし居候ニ付見物ニ參り候處寫真可遣旨立申スニ付相頼從夫井上石田一同岡崎ヘ尋參ル留守也歸り懸け武藏野ヘ立寄柏崎を尋候處不居候別れ候而山瀬泊り方迄遊歩七ツ半前頃歸ル諏訪ハ書狀相達居ル總督ニ之返書も一同來候ニ付添書之上差出候事

○同廿二日

極快晴風無く別而靜也暮方ハ變り模様ニ成ル

○同廿三日

昨夜中ハ雨

○同廿四日

雨午頃ハ晴

○同廿五日

朝薄曇夕晴本陣ヘ出候處金子明日迄延ヘ呉れ候様との事也歸り懸ス丸之邊梅花一見す

○同廿六日

晴四ツ半前金子爲受取本陣ヘ出歸リニ高松氏見舞午過ル頃歸ル一時頃回天戻り入及一覽居候内赤城歸り來り手負二十人余入院之儀申ス同人一同高松氏ヘ參り申談當病輕き分二十七人出院之上設いたし追々入院扱昨曉ハ回天ニ右岬ヘ進ミ明ケ候得ハ惣鐵船ヘ無二無三ニアメリカ之印を揚候而乗付儲船より伺見る内ニ印を變し打懸ル右船ハ五人程切入五十ホン



ド二發打込一發ハかマを目かけ打込候處烟出し曲り一發も能キ、候と見  
六七人被打揚候由賊船飛龍丸武藏丸薩之春日丸土之ゴンホ肥センノ鐵船  
藝ノシン天丸外ニ鐵船一艘とクワ之湊ニ掛り居右船々々如雨霰大砲小銃  
打懸船も所々ニ當り候へ共要所ニハ不當候由之ヨシ鐵船ニフレ候處少し  
損候由討死十八人手負三十貳人にて頗ル烈戰一時間程之由アシユロツト  
蟠龍ハシケニ逢候節互ニ相失し戰終り引取之節湊口ニ行逢合圖ニ為  
引戻蟠龍も又少々手前ニ逢候由二艘共事ニ不逢を残念かり二艘ニ打  
懸之策も有之候得共強而差留候由也夕刻蟠龍も戻り來ル○諏訪より書狀  
晝少前達ス大鳥井上並川等へ之書狀共相届ケ候○病人共出院大勢取計手  
負病人共入院○夜中諏訪へ之返事認

○同廿六日

晴諏訪へ之返事町會所へ差出早朝也松平太郎殿フリー子來ル○昨日ハ高  
松先生不快也

○同廿七日

晴病人へ見舞大勢來ル榎馬荒井郁之助等も來夕瀧川等來失敗之舉動有之  
候ニ付不爲通差戻候事

○同廿八日

晴永井玄蕃頭大鳥圭助入來諏訪ハ廿六日出書狀相達ス金子返ル所々ハ之  
書狀相届候

○同廿九日

晴榎本總督被參候蟠龍水夫始死人有之

○同晦日

曇會計へ出去月中迄之帳面持參致ス並河來明日起之由也

○四月朔日

朝晴總督被參病者へ金子賦リニ相成晝後八ツ半頃ハ並河へ可參高龍寺立  
寄酒ニ預ル從夫途中ニ逢諏訪へ之書狀相頼柏崎武州樓ニ居候由ニ付相



尋候處歸リニ相成候さる加藤ニ逢歸リ懸ケ兼与へ立寄並河ニ逢

○同二日

可也之天氣會計の藥品共遣ス八ツ半頃諏訪の之手紙並河へも遣候ニ付早速相送候處四ツ時頃出起之由ニ返す高龍寺の竹中殿へ之手紙遣候ニ付町會所へ手紙添差出ス

○同三日

曇晝以前の雨雷鳴諏訪へ手紙並河書狀返す川村錄來ル

○同四日

朝曇五ツ半過頃晴晝食後小黑佐野一同一瓢ニ而山へ登り觀音之處ニテ一望從夫頂キに登り四方眺望殊ニ好同所ニテ開キ從夫山傳ニシリサワへ下り鮮魚求候處不獵ニ而無之ニ付谷地頭へ廻り右茶屋相尋候處いつれも休ミ居埒明き不申候ニ付梅花李花を折右道々休ミ茶屋之椽をかり酒相用暮ニ歸ル

○同五日

雨八ツ半頃少々直り暮以前上ル柏崎の之手紙遣し六字頃武州樓へ參吳可申旨ニ付夜食後參ル出懸岡崎氏に立寄候處朔日を留守也加藤章太郎一同酒給へ夜半過歸ル

○同六日

晴八ツ時頃俄ニ風起り暫時雨六ツ半頃英之赤船入港右船へ木村來り候由ニ付赤城承リニ出ル觸有る町中不一ト方騒也暮合より木村尋ニ出ル結城繁樹松前を來候趣ニ付尋來候ニ付倉酒差出一同ニ出ル柴を尋候處不居蛇足ニ居る歟不知候ニ付同人一同ニ而罷越候處三宅三輪居ル津田主計も來り同店ニ而酒差出一同歸ル四ツ時頃也

○同七日

天氣市中大ニ騒々取片付頻り也四ツ頃木村尋ニ柴へ立寄候得ハ柴居り面會木村來意大抵相分ル從夫本陣へ出病院不移一條及挨拶序ニ金之及談



事候處夕刻可出旨也晝頃歸ル結城今朝出起之筈也八ツ頃方七面社邊崖カ懸ケ高ク登り市中一望之積ニ而懸ケ候處へ三宅三輪來ル立戻り候處明日松前の方へ出起ニ付暇乞也兩人歸り後七面社へ登り候得ハ瀧川宮内等婦人數人召連見苦躰ニ付不立寄同所椽ニ而遠望山瀬泊の方方高龍寺脇へ廻り市中之様子一見七ツ過頃歸ル食事後午後早速異船共不殘出帆○下陣金爲受取出候處榎本泉州も參り被居從夫三宅へ爲暇乞出四ツ頃歸ルユコル留主中ニ(欠字)宅へ引移りし由也

○同八日

曇山瀬風賊不來

○同九日

曇り小雨折々降夕心祝ひ致す賊六艘松前へ廻り候由注進有之趣也

○同十日

曇八ツ半頃方蓮沼田中佐野一同一瓶爲持十升櫻花見ニ出大山上ニ而開瓢

諸人來從夫七面へ上り同所茶屋ニ而一同酒給へ折節夕陽晴東北山ニ映し眺望殊ニ宜シ川村來候ニ付金子之儀申談蓮沼ハニコル之處へ參候ニ付田中一連ニハ分れ佐野一同所々遊歩暮ニ歸ル

○同十一日

快晴朝木村來ル晝食迄談話○君上御機嫌伺始品々承ル

○同十二日

晴四ツ頃方柴方へ參り昨日之儀品々申談ス岡崎氏山田來酒給正午歸ル蒸氣異船有川方ニ當り滯船す

○同十三日

小晴額兵隊三人キコナイ之戰ニ手負候由ニ而來戰ハ未タ全く勝利迄ニ不至内出起候得共多分勝利ニ可有之趣也八ツ半頃方七面社愛宕山遊歩八幡社迄參り大町へ出七ツ半頃歸ル無程俄ニ曇り雨夜中西風ニ變し風甚敷雨

○同十四日



晴三宅三輪松前ハ手負引連船ニ著之由五ツ時過頃來ル仍ハ多勢ニハ六拾人余之由ニ付高龍寺假病院之談事ニいたし早速夫々取計を付高龍寺へ談事ニ罷出皆著之上ニハ病院へ入込候儀相叶ハアルカツ候付斷返し松前表も勝利キコナイも彌勝利之由也鈴木元三郎來候ニ付引揚之儀及議論候處少し譯有ル義也夕ニ至り二岐股之方も亦勝利之由手紙ニて申來但出張之添役ハ也

○同十五日

晴岡崎來松平太郎殿爲見舞被參○七面(欠字)

○同十六日

晴回天丸始出帆ニ付夜食後高松氏へ同見物ニ出歸リニ右下宿へ寄ル

○同十七日

晴十升參り從夫井深居宅相尋山本參り歸リニ三宅旅宿相尋暮以前歸ル

○同十八日

晴早朝木村來越國廻り船乗船之心得ニ付暇乞也林一同承ル高橋辰次郎も

來江戸川之儀談す手負之三木某も來松前へ賊襲海陸より廻り候ニ付引揚候段八ツ時頃相分ル手負も多分有之由ニ付高龍寺假病院之儀申遣ス同夜より當病之分爲引移候ニ付三宅を右へ可差置談事候處不整候ニ付高龍寺へ罷越同人と及談事候處彌以不整夜中手負共參ル

○同廿日

霧四ツ半頃ハ晴今朝深霧ニ乗じ賊キコナイへ襲來遊擊隊額兵隊深手負之者有之伊庭八郎も手負ニハ來ル其外手負大勢候ニ付高龍寺當病之分五稜郭へ遣ス夕刻賊船五艘と回天及發砲遠ハ不當今日松前引揚之兵と大鳥等之援兵挾打ニ仍ハキコナイを賊引揚ル

○同廿一日

晴總督被參永井玄頭中島等來炮兵頭關廣衛門沓之儀及談判

○同廿二日

曇折々小雨遊擊隊引揚五稜郭へ來ル由三宅來明日乗船ニ付爲暇乞夜中同



所へ爲暇乞出ル留守也

○同廿三日

晴朝岡崎へ参り歸りニ三宅へ爲暇乞參ル高龍寺へ立寄午刻歸ル朝木村來ル乗船歸り之儀申談夕刻又々來ル彌乘船ニ決定之旨ニ金五圓借用之儀申談差遣ス

○同廿四日

朝少々霧之模様有後快晴拂曉大砲二發之合圖有リ五ツ時過カ賊船春日丸を主船ニカストンゴール加賀守其外二艘合五艘ニカ向地富川有川之方より漕來依カ回天蟠龍千代田之三艘臺場邊ニ位迄漕出五ツ半頃より發砲相始リ互ニ打合候得共遠カ不當回天始打ナカラ少々ツ、臺場内へ漕入ル五艘線懸リニ進寄ル臺場ニカハ發砲見合居リ矢比見合四ツ時頃カ賊船を打賊船も五艘ニカ線替ニシ進來ル四ツ時過頃カ發砲甚しく同時頃臺場を打候彈丸病院新建後之荒物屋へ打込右屋之妻之右足を大ニ破ルされとも骨

ニ不懸蒲團之積置中へ丸打込已ニ煙り揚り候得共近隣打寄消留ル同刻病院屋上を彈丸走り右上之<sup>(欠字)</sup>屋ニ屋脇之右へ當り石を粉ニシカ彈丸も破れる右屋之脇板を三ヶ所打カすり丸半ニ屋中へ彈丸入此時ニ當カ燒彈丸來候トカ病人とも騒立一時騒然たりと雖制止して騒動を休<sup>カ</sup>四ツ半過迄戰甚しくしカ五艘共ニ有川方へ漕寄暫時戰止九ツ半頃有川之方カ向岸之方へ寄五艘漕來線替頻リニ發砲回天始臺場内東へ懸リ應砲賊船進來を引受臺場よりも頻リニ打出す賊二カ廻り線替春日丸を始としカ向岸へ寄追々退<sup>カ</sup>春日丸其外へ手負候様子ニ見ゆ八ツ半時頃也後ニホルタンフヘイ來カ春日丸へ臺場と回天カ打込候ハ十彈丸程カストンゴールへ壹發加賀守へも當り候ならんと云回天臺場共手負なし回天へ三ツ計玉を受候得共障ニ不成ト也尤愉快之事ニカ有之也○溜町由松妻始母子彈丸ニ當リ裏町ニカ彈丸ニ當リし婦人とも三人并向地カカセキニ來居候柏五郎も來大ニ取込也同時異人兩人も亞館へ移ル柏五郎ハ左之足首カ折切れ出血始カ後ニカ玄



關に來ル時人事なし續而死去す○三宅大學來ル居所を頼竹中殿も來ル一同乗船ニ極而引取○今日早朝を二股ニも戰有りと云暮合手負四人來ル

○同廿五日

東風曇雨晝食事後本陣へ金子爲受取出ル榎本川村高橋ニ懸合ニ及出懸ケニ小林鐵助へ及懸合蒲團之儀也高松氏手負等引受方之儀ニ付本陣へ出榎本對州不都合之挨拶有之ル昨曉より二股へ賊打來頻リニ合戰晝夜之由也今曉ニ至り賊勢屈而引退候由

○同廿六日

雨五稜郭病院を手負人來候節之儀ニ付手紙遣ス夜中牧野主計松平太郎を之頼談ニ而榎對不都合之挨拶方ニ付手負人入之儀爲談事來ル

○同廿七日

晴横地秀之丞榎本對之頼ニ付爲懸合來夕高龍寺へ廻ル夜十二時頃辨天町辨天脇を火追々及大火高龍寺へ燒寄候模様ニ相見候ニ付罷越夫々及

差圖一旦心配いたし候處幸にして遁ル鎮火ニ趣彌無滯を見留二度目鷄鳴ニ至而歸ル○亞英佛之船共入港夕ニ至り退帆○大山酒昨日買入今日を

○同廿八日

晴折々曇横地を之使ニ(欠字マ)來晝後終横地來病院金子之儀蒲團等可爲渡候間以來手負人有之候とも入院之儀榎對を得頼候趣ニ而來ル岡崎來ル高橋辰次郎湯之川へ湯治ニ越度旨ニ付柏崎へ手紙遣ス

○同廿九日

薄暮東風朝敵船六艘矢來ナイに取懸海陸より進來ル烈敷進船より大炮ニて打立候ニ付胸壁難保衝鋒隊手負討死多く諸隊追々引揚午頃ニ至而船を有川之沖へ漕寄候ニ付心能罷在リ候處はたして右場所迄敵進來諏訪手負ニて來ル高龍寺へ間席頼ニ晝後參ル途ニてフリウー子ニ逢此夜柴來ル晝榎對馬之返事且泉州を之口上申すヲロシヤに病院警衛之儀頼可申旨も談す鷄鳴也暮より益曇り暗黒也千代田形過る暗(欠字マ)へ懸り候ニ付破り而乗捨



る○此夜敵へ夜討之手筈ニ候處備固して不能

○五月朔日

曇折々小雨○戰無之八ツ半頃高橋彌吉カロツシヤ承知之旨申來候得共趣意篤と不分候ニ付承るニ本陣へ出候得共川村留守ニ付不分夜ニ入又々出而承る夜半古屋來る今夜七重濱進撃之筈之旨也二日早天新撰組津田某も少々手負也七重濱敵追退ケ候旨也

○同二日

晴朝食後岡崎氏相頼魯國マレンタ方へ病院護衛之頼且護衛方仕様相尋として罷越四ツ半時歸ル五ツ半時過頃カ四ツ半頃迄貳艘臺場ニて五艘引受砲戰也ストーンコール藝州之船へ彈丸當るカいづれも漕戻す畫結城(欠字マ)來ル柏崎も來ル柴も同斷前兩人ニ酒食間宮魯三郎怪有ニして脱し來ル入院六ツ過頃カ井上林柴等來る情態を歎息して談す續カる金子來ル酒爲給候敵夜拆カを心配す

○同三日

折々雨午後臺場カ發炮數聲ニ付及見分候處不相分仍カ山瀬止泊カ賊船寄候哉ニ相聞候ニ付同所へ物見ニ出ル承り候得ハ三本帆船來候故砲發之由ニ候得共最早不相分本陣へ金受取ニ木下氏出ル此夜遊撃隊七重濱カに夜討衝鋒隊ニ而大川之賊へ夜撃候處いづれも勝利也

○同四日

晴四ツ前頃カ賊五艘ニ而繰懸りニ漕來る回天井ニ臺場を目懸頻りニ戰蟠龍ハかま損し手入中ニ付不動四ツ半過頃にして砲戰終り賊船退く午半頃賊船又々進入之様子ニ候得共不來程經而臺場ニ而數發發砲す不審ニ候處跡ニて承り候得は怪者入候哉ニて臺場砲門へ釘を打置候者有之漸々にして一二挺を以賊を打砲す高龍寺へ參ル

○同五日

東風大雨回天あんしやうニ懸ル夕刻ニ至而漸はつる高龍寺へ參ル暮柴板



倉來酒食晝馬嶋來酒食

○同六日

雨葡萄酒之儀心配候處壹樽相求會計の百金受取ル

○同七日

晴五ツ時前を春日丸ストーンコール朝陽丸深漕來大戰爭臺場へハ外貳艘ニ  
取掛五ツ半前頃回天艦車しくえに當り候ニ付無據淺場へ乗上る發砲春  
日朝陽ニ益入込打砲ストーンコールを頻りに發砲右三艘も數多手負四  
ツ半前頃ニ至る春日退始ニあいつれも有川沖へ退艦す病院高龍寺へも飛  
丸來り其外所々に玉來ル丸一家火燃上り候得共消留ル回天蟠龍怪我人  
二拾九人入院之事臺場ニて怪我人無之過日炮門共に釘打候者砲兵取締ニ  
有之白狀之上兩人斬首山瀬泊に梟首之由敵と内應之所行ニ有之候由新撰  
組ニて山上に地雷火様之もの仕懸候を五人召捕候由高龍寺來る歎願候ニ  
付運上所竝ニ相馬主計大野右仲方へ罷越高龍寺へも參り右一件談事相整

七ツ半前頃歸ル今日戰爭回天之奮發感ニ余有り討死五人と云内塚本以下欠錄介

○同八日

朝薄曇四ツ頃を晴五ツ時頃を大川ニ當り戰爭始ル右手負人六拾名程來ル  
本陣運上所高龍寺へ參ル同寺納金之儀相調ふ

○同九日

晴戰なし玄頭被參土方島山等來

○同十日

東風朝曇四ツ頃を晴

○同十一日

晴曉を山瀬泊へ貳艘七重濱沖之方を貳艘シリサワヘ之方へ三艘ニて陸地  
をハ五稜郭へ迫り早朝後之方を上陸直ニ山手へ登り山上を發砲相迫り諸  
方之砲聲頻ル盛也依る病者心配兼而約し置候マレンタ之方へ罷越相頼吳  
候様歎願ニ付即刻罷出相頼歸路猶不動之前ニる官軍ニ出逢縛ニ附鳥井下



ニ一時余居ル從夫見合歸ル其時頃也頻リニ戰盛ニ朝陽もハン龍之丸ニて沈没歸リ以前病院へも官軍入來都而談判濟ニ相成居ル高龍寺も同斷寛大之御所置ニ候處最初ハ津輕藩入込十數人を殺害其節木下も逢殺害赤城一旦被縛候得共聞分縛を解ク其内薩州藩衆入來彼藩暴舉を止むる之由回天丸々山上之官軍を打自燒して上陸蟠龍丸ニて頻リニ戰夕刻ニ至リ自燒して臺場ニ引揚ル臺場外二ヶ所ニ火之手揚高龍寺も近（一字不明）之處前之方ニて防留其内沖口方々又々火之手揚初ハ火先宜様ニ候處又々東風甚敷相成終類燒す仍而手負人共不殘病院へ爲引退候海陸戰殊ニ甚し○大小ハ除醫師外之器械大小不殘相納

○同十二日

高龍寺入來御手當取計今日も臺場敵船等ニて砲戰有り時計所持之分不殘可納旨ニ付取上ニ成ル夜半頃薩州隊長池田次郎兵衛村橋直衛其外四五名諏訪方へ來リ五稜郭并辨天臺場恭順之趣意ニて種々談判歸リ候上高松氏

拙者へ諏訪の意を承ル三木酒井木村へも申談五稜郭并臺場へ使可遣外無之ニ決定す鶏鳴過キ也

○同十三日

晴五稜郭辨天崎御臺場へも草案認爲持遣候處少し書加ニ而先ツ御臺場計へ可遣旨ニて返事遣ス仍而彰義手負人高橋與四郎一聯隊手負伊南誠一郎相頼御臺場へ遣候處返事來右ニ付薩藩永山來て五稜郭へも直ニ使節可遣旨ニ付伊南高橋文四郎可遣之處高橋ハ重手之身ニて痛候ニ付回天丸乘組坂脇奎之丞頼遣ス最早暮方ニ參ル明日晝後七字迄挨拶有之度旨之機限ニて出ル今日も戰有り村橋永山氏度々其外入來之事

○同十四日

戰なし晴暮過永山氏歸來リ續而坂脇伊南歸リ來總督并副總督ハ兩名之返書持參會議所へ差置候由夜ニ入松岡相馬主殿大野右仲等五稜郭ハ歸リニ立寄禮申述ル○鶏鳴近ニ至リ五稜郭總督并副總督より之返書寫ニ而薩州



送遣明早朝永山罷越候間臺場へ右寫を寫取可遣旨尤其節一同永山も臺場へ可參旨也仍右寫取臺場へハ彰義隊服部安次郎可遣様談事承知ニ候事

○同十五日

朝曇曉七ツ半頃諸船並ストンモール<sup>コカ</sup>カ五稜郭へ向大ニ發砲す今晝頃唯今と申す義ニて薩藤岡より手紙ニ而醫師壹人一昨日臺場へ參り候由兩人之内壹人會議所へ可參旨申遣候ニ付伊南蓮沼差出候事右ハ酒肴を臺場へ送ル使節ニ行ニ付一同之義ニ付呼寄候也今日臺場和議成ルと云○暮合村橋來る臺場手負人可遣旨談

○同十六日

東風雨今日も諸船より五稜郭へ發砲す昨日よりハゆるやか也山上へ立退居候町人共追々下住相始ル今日津輕陣屋落ると云○臺場手負人拾八人參ル今夜曉過る曉ニ至諏訪死去す暮頃村橋より壹人參り吳候様申來候伊東

罷越候處先以薩州ニて警衛之筈也都て宜敷取締候様との事也○器械納之分ハ同人迄心得ニ可申入旨也

○同十七日

東風ニて晴朝少々五稜郭ニ戰有りと云終日取調ニ困却す暮ニ至り村橋へ器械納之分相廻す藥種間違ニテ當院へ相廻候ニ付臺場カ申立と相見へ相送遣候事○諏訪取置相調候

○同十八日

曇五稜郭昨日降伏之由寺師來て告申候村橋方へ手負人名差出候終日人別改ニ困却す辻好太郎<sup>(二字不詳)</sup>之筋有之候ニ付縛す○相馬主殿森彌一右衛門來今日五稜郭カ手負人送來候得共席無之旨相答候ニ付外へ轉す濱尾最一郎白岩覺之助加藤昇平杉原半治泊す

○同十九日

雨大病院カ高松呼出ニ來蓮沼赤城伊東友賢も出ル川添誠之丞入院菅野湫



水も來大野内藏介も來候事は迄薩州ニテ取計來候處以來大病院之指揮ニ可隨旨永山申聞候事手負人底所明細書調ニ付大取込

○同廿日

晴糧米之儀ニ付薩州村橋方へ手勢遣し受取ル大小<sup>（欠字マ、）</sup>方々可受取旨相分ル遊撃隊長方手勢ニテ數人病人送來席無之ニ付外ニ移す○湯治ニ居候病人共數人淨玄寺へ著候由花岡演尾來山路小林入院之事是迄御雇之醫師大病院方沙汰ニ相成是迄之通出仕之筈也

○同廿一日

曇曉御臺場并總督其外上等之分出帆ニ相成候由取締手傳江幡徳三郎來り元會津屋敷假病院ニ爲渡候間壹人可罷越候ニ付一同罷出候事高松氏も淨玄寺方直ニ來りニ相成薩州寺師雙眼鏡并時計四ツ返しニ來ル

○同廿二日

曇湯之河方不殘引拂來候由也病者快方之者貳拾人余出院稱名寺へ移り候

事千代塚始取世話之名義聞濟ニ相成同人坂脇元會津屋敷へ移ル

○同廿三日

曇折々小雨明ケ方大雨今日九半一升ニ罷在候病者元會津屋敷へ引移候様永山申聞候ニ付引移ス爲其兩所へ爲改罷出ル○英醫竝大病院方數人來當院人員書竝人別書取調へ差出ス

○同廿四日

曇今日藥代四拾壹兩余受取來ル英醫元會津屋敷竝淨玄寺見廻候由右ニ付切所可致者彰義隊小宮山彦之丞額兵隊久太郎兩人當院へ移ル十五才以下之者會議所へ同道之事

○同廿五日

曇曉方雨終日東風寒井上來藤岡も來候由風順惡船損居候ニ付過日出帆之船共漕戻し候由咄有之候由之事

○同廿六日



東風終日大風雨別義なし○七尾酒求

○同廿七日

雨天五稜郭を持參之藥籠並安藤精軒藥瓶入之箱見當候旨にて村井佐野大病院へ出候節差出候様との事ニ付爲差出候英醫及安藤精軒始醫師共來り病人夫々見舞ニ及候額兵隊指圖役遠藤良治俄ニ差迫死去す

○同廿八日

朝雨追々模様相直ル晝後天氣ニ成ル官軍蒸氣船朝一艘出帆すストンゴール外二艘晝後蒸汽を焚を見（欠字）頃出帆夕ニ至り外ニ壹艘出帆すと云々秋田表ニ軍始ると聞青森より歸候町人之咄ニ右青森へ秋田表より援兵之儀を櫛の齒を引か如く來ると右ハ仙臺會津庄内邊之脱兵なりと云筒井助次郎高橋辰次郎等金無心申越置候ニ付稱名寺ニ居ル趣ニ付手紙ニ而遣候處禮狀遣ス

○同廿九日

晴金子並河の高松蓮沼赤城へ手紙遣ス今日も官軍蒸氣船出帆すと云々英醫安藤精軒今日も來ル

○六月朔日

晴折々曇額兵隊久太郎右之手切斷ニ付英亞醫師深瀬等來ル

○同二日

晴曇不定東風（イ）寒學兒樂性日本外史其外本類拾貳箱長野昌英方へ差出候○金子並河へ手紙差出候處居所不相分

○同三日

曇金子並河居所爲相尋候處不相分并深稱名寺へ移り候由にて手紙遣ス右寺ニ柏柴始居候由申越諏訪金之儀稱名寺を度々申越柴を廻し置候金并諏訪薩州より到來二十五兩之内二十兩相廻ス且間宮所持之分も相廻ス○三石來岡崎始之居所も相分

○同四日



曇昨日度々申越候金之儀入組候ニ付稱名寺へ赤城出向相頼間宮諏訪金之儀ニ付云々有り

○同五日

くもり在住隊教導役關口八郎來ル御臺場へ入候者大小可受取旨及談判候へ共元々御沙汰之次第と齟齬いたし候ニ付伺之上ならて難渡旨相斷伺書差出○間宮を稱名寺へ送遣ス○兩日之内幸三郎來ル初る金高分ル

○同六日

曇關口又々來る大小之儀可受取旨申候へ共同之御差圖無之ニ付不渡井上千城來る右大小可渡旨會議所之決定也と云乍去先御沙汰且病者心得罷在候儀等申述候得ハ立歸可及評議其上可及挨拶旨ニて歸ル取締富士又八郎來る右大小之儀段々之次第相咄候ニ付次第相分候故可渡旨及答候處明日九時受取人可差出旨ニ歸ル○間宮再發之由ニ而稱名寺へ送遣ス然るニ右ニ居候者ハ一應之儀不申越甚不審と存候

○同七日

曇大小受取關口來候ニ付受取書取て相渡す  
朝迄間宮之儀申越候哉と相待候得共何之儀も無之ニ付同藩の方へ及發言候次第有之候事

○同八日

陰東風終日大雨

○同九日

終日雨東風

○同十日

陰天雨

(欠字)

求

○同十一日

晴陰不定木下期日ニ付心新也今暮頃ハ高橋友安不居種々探索夜中及雨○三人ハ金取戻シ(欠字)を



○同十二日

天氣之模様ニ成ル乍去快晴ニハ無之昨夜長鯨丸入港之由ニ付一見す今日蒸氣ニて官軍出帆すと云東條も來候趣傳言有り蓮（一字不明）伊之三人へ五十圓ツツ相頼○千代田戻り入

○同十三日

陰赤城東條方へ朝之内出迎

○同十四日

晴古屋氏今朝死去井上千城兩度來ル醫師姓名書差出候様之聞○昨日兩人死罪之者有之右布告書來ル

○同十五日

晴今夜金箱食事之間ニ紛失夜中種々探索且手配等いたす

○同十六日

兩早朝昨夜之業人相分看病人榮吉親分へ引渡鶴吉龜吉へ褒美遣ス

○同十七日

曇折々小雨

○同十八日

晴

○同十九日

曇快氣之者貳拾壹人出院寺澤兵衛來醫師是迄之進退之次第并ニ當院疊敷を問ニ付書出ス○ヌチール之弟來る今夕英之帆前船コーシヨウ艦ニて貳三百人横濱へ向出帆ニ可成と云

○同廿日

曇晴之事と有り今日降伏人之内長鯨其外之者共百人程免許ニ成と云回天義三郎蟠龍年太郎等禮ニ來る受人を得御暇戴き候と云近々長鯨出帆ニ可成と云

○同廿一日



曇四ツ過頃英之帆前船日本印を揚出帆○夕英船入港

○同廿二日

晝前中晴後雨高松長野昌英呼出來病院掛りハ彼ハ可廻旨申す晝後富士亦八郎來而彌右之儀申談淨玄寺元會津屋敷共ニ同斷之旨申ス仍て諸帳記勘定書等引渡候處守衛之者無之其内俗事取締申付られ候旨ニて渡邊關藏來松前藩之由也右へ引取方申談候處不相分高松ハ申談候得ハ取締へ出候序有之候間承り可申旨ニ付歸りを相待居候内夜六ツ半過ニ至り同人歸ル猶沙汰可致候ニ付夫迄先ツ是迄之通ニて居候様との事也仍て先ツ其夜ハ同所安眠す○手負當病輕重之次第生國年齡今日中ニ可差出而尤元會津屋敷能量寺共ニ同斷之事也夜半過迄ニ取調差出候事

○同廿三日

雨今日ハ守衛兵晝夜四人ツ、相詰候様相成ル新兵隊之趣ニて來ル○會議所ハ高松氏呼出ニ來佐野噂其外之用事也○佐野ハ降伏人之内不入様ニ相

成ル拙子守衛兵從是可相廻旨申候由ニ付今哉々々と相待居ル○今日元會津屋敷淨玄寺掛り之者引移候由也

○同廿四日

晴今日も何之沙汰無之先ツ其通ニ相勤居ル三拾三人出院ニ成ル寺澤來ル醫師生國先役名當地へ來候而ハ何役相勤候と申儀可書出旨申ニ付拙者も其砌一同書出候事○柴柏崎方ハ配分金相廻候事間宮分も相廻候ニ付直ニ相渡○夜ニ入寺澤又々來病者共ニ生國役名等醫師之通ニ可書出旨申ニ付手下いたし病者共ニ不殘承届書入遣候處鶏鳴近ニ相成ル○高松長野へ出候處明日病院不殘引渡ニ可相成旨咄有之候ニ付晝後ハ心掛いたし候暮合ニ至り關藏を以取締ハ其儀申越是迄殘米之分百(欠字)人へ今明日と割渡

○同廿五日

曇晝後ハ晴引越候付大混雜也富士亦八郎晝後來病者引越八ツ半頃迄相濟跡取片付在來之諸帳記舊帳壹結通帳之類一結高松名ニ而長野昌英方へ送



遣し勝手働は相殘し洗濯女親子も同斷小使並看病人ハ不殘引連病院ハ日野(欠字)右兩人へ引渡暮ニ元會津屋敷へ引移申候事

○同廿六日

曇折々小雨松前藩隊長何々邊逢度旨ニ付及面會候處病院掛ニも無之病者ニも無之如何様之次第ニて當方へ參候哉之尋有之候ニ付先々懸入候様相咄御沙汰を相待罷在候旨相伺候得ハ其旨取締へ可申述旨ニ亦相分ル無程取締へ相伺候處辨天崎御臺場へ罷越謹慎可罷在旨ニ付承知高松ニ諸帳記金錢等引渡守衛護送を得七ツ時以前頃辨天崎御臺場へ入ル居所を守衛人ハ差圖して是迄居候見國隊小頭平間恒治と申之由跡ニて承ル右居所を下ケ其所ニ可居旨申聞一同之者傳習隊中嶋與七同士官隊大野俊二郎遊撃隊山口寅吉彰義隊山本徳次郎海軍隊烏山三郎も右ニ續可居旨也守衛人退候て席談少々有之右居所(欠字)寢場之如し人間の住すへきにあらず右小頭周旋して居所を別梁士官之居候處へ談吳候ニ付右へ引移山田氏居る外ニ高

橋淺之丞岡本潤馬田中兼次郎加藤八十二等之者并見國隊之者之居所へ割込其夜明ケ

○同廿七日

天氣姓名調ニ兩度來夜ニ入明日入艦ニ候間四ツ時迄ニ揃置候様と之傳也但士官計○下役ニ頼品々相求

○同廿八日

天氣早朝蓮沼赤城之内診察之儀願申立候ニ付赤城來ル仍亦高松始(不明)之傳言相頼込此間相廻吳候五兩三分合亦諏訪之金子(不明)兩三分實行寺へ遣置吳候様相頼右ニ付赤城心配いたし吳金子之儀若赤城存意通ニ相成候ハ、諏訪之金へ合可吳旨相頼相則晝後早速ニ乗船候亦猶又傳有之候ニ付又々下役相頼遣候處承知之返事來晝食無程相揃著替等手自持參出起内溜運上所脇へ扣同所ニ亦稱名寺ニ居候同士と一見之上遠方ハ一禮無程阿州之戊辰丸へ順々ニ乗組警衛ハ備後福山賄ハ備前之手也箱館港七ツ時過出帆海上



大ニ和キ波平也暮ニ津輕海之沖へ出夜中も波平也沖を漕候故歎モヤニて山一切不見

○同廿九日

天氣無事ニして航

○同晦日

天氣朝松魚漁舟大出居候ニ付山ハ不見候得共荒濱或ハ相馬沖邊ならんと云

○七月朔日

山一切不見航す夜半過ニ至り一時間程風來雨

○同二日

晴折々雨午時頃犬房ヶ崎を過暮ニ房之洲之崎を漕入ルと存候處不入

○同三日

北風天氣洲之崎を不入して大嶋々山舟先ニ見る承れハ夜中故舟を不入由

也八ツ半過頃品川沖へ著岸ス風度々替昨宵ハ船中炎熱如燒不堪困居がん板へ出る衆皆凌炎明日ハ上陸也用意之儀守衛ハ傳有之

○同四日

晴朝モヤニ而品川駁与不分五ツ過頃守衛船漕來候ニ付皆上陸用意す五ツ半頃乗船品川濱手柵木之有之空地へ衆を溜め跡船之漕來を待合す日陰なく炎天ニ困却す皆々上陸之上品川願成寺へ備前之護送ニ而四半前入寺四百五十人一同也船中の可比ニ非されとも大勢故悉雜倒す始て人之住むべき所へ入候心地也船中見國隊と雜居候處右隊出張も永く引續き御臺場厩如き所ニ凌し人々なれハ所謂甲冑キシツを生し衣類虱連行故枕を並へ而伏せハ虱頻リニ飛込ミ覺有之而則蛇カツの恐れをなしといと眠得す入寺之上轉檢すればケツト虱横行犢ビコンハ巢窟をなし剩蠶マイをハガス時之如し爾後東嶽奇逸樓等扇面へ書畫ヲ數多染筆頗ル終日之積屈を伸ん心地也明日ハ又宮津侯之許へ御預ケと云居所ハいつれ之所歎不分



○同五日

拂曉か雨今日ハ引移ニ付雨具心配之處御渡可相成と云足草鞋御渡ニ成ル  
 八字頃出起矢張備前之護衛也英式訓練ニて前後を衛赤羽へ出増上寺之内  
（欠字）  
 へ著四ツ半過頃也四百五十人門内へ繰込せ同所ニ亦ハ親兵と備前ニ  
 て人頭受取渡有之備前兵退て五拾八人當院（二字不明） 寮へ分配ニ亦入蒲團壹人  
 ニ付壹枚ツ、蚊帳拾四張御借渡ニ成ル風呂も立被下食料も是迄ニ無之程  
 丁寧ニ被成下御親兵之咄山田承り候處左之如し箱館降伏後薩長十萬石ツ  
 ツ御加増土佐三萬石彦根大柿同斷御三家壹萬五千石ツ、也と云々○扱今  
 日同行之者當寺之分三ヶ所ニ分ると云御守衛ハ御親兵ニ百貳人ツ、詰合  
 警備す午後天氣夕地震

○同六日

天氣夕酷暑谷中へ山田氏兩名之手紙差出ヌ取締カ人名生國年齡元身分可  
 書出旨ニ付取調差出候事尾張屋來調儀物相頼暮以前土屋氏來

○同七日

霧四ツ頃か晴中田來折節調義物頼人來中（欠字）ニ付寛話を得す夕樋口  
 來會津之様承ル○今曉か衝鋒隊ニ病人有り且見國隊も長病有之ニ付醫師  
 來

○同八日

炎暑甚し然れとも消暑也御徒目付山口徳次郎來大政官カ 日誌火鉢等頼置候  
 分持來池上岩次郎來

○同九日

朝モヤ曉か凌能終日曇雨少々降晝前町野忠治郎來

○同十日

朝モヤ續而曇八ツ頃晴次第ニ酷暑合雨夜中雨晝前池上岩次郎來夕山田  
 氏へ中地村石井惣右衛門福良村武藤善五右衛門來

○同十一日